

県道太田上町志度線道路改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

六条下所遺跡

2021.2

香川県教育委員会



# 序 文

本書には、県道太田上町志度線道改築事業に伴い平成27年度に発掘調査を実施した、香川県高松市六条町に所在する六条下所遺跡（ろくじょうげしょいせき）の報告を収録しています。

六条下所遺跡の発掘調査では、弥生時代前期の水路とみられる溝群と近世の掘立柱建物群が見つかりました。弥生時代前期の溝群は隣接する遺跡から連続するもので、当時の周辺の開発の歴史を知る手がかりを得られました。また、近世の掘立柱建物群が見つかったことから、西に隣接する空港跡地遺跡の成果と併せて、農村地域の集落が広がることがわかりました。

この成果が本県の歴史研究の資料として今後広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、県土木部道路課並びに関係各機関・地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも埋蔵文化財保護行政並びに当センターへのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2021年2月

香川県埋蔵文化財センター

所長 西岡 達哉



# 例 言

1 本書は、県道太田上町志度線道路改築事業に伴い平成 27 年度に実施した、六条下所遺跡（香川県高松市六条町）の発掘調査の本報告である。

2 発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間 2015 年 11 月 1 日～2016 年 3 月 31 日

担当 森下英治・小野秀幸

4 発掘調査及び整理作業においては、次の方々、機関の協力を得た。

香川将慶、香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。乗松真也が執筆、編集を担当した。

6 本書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第Ⅳ系）で、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は、次の略号により表示した

SA：構 SB：建物 SD・SR：溝 SK：土坑 SP：柱穴 SX：落ち込み状遺構

8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（m）である、

9 遺構断面図中の注記の一部については、色調に小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。

10 土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。同表中の残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11 石器実測図中の石材は表記がない限りサスカイトである。

12 遺物の時期は以下の文献に掲った。

弥生時代前期

森下英治 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」財團法人香川県埋蔵文化財調査センター編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 29 冊 龍川五条遺跡Ⅱ 飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか pp.284-325

中世

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における土器編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会ほか,pp.405-468

佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業(1) 9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種』『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』,pp.41-72

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業と整理作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	7
第2節 層位	7
第3節 弥生時代以前の遺構と遺物	21
第4節 中世の遺構と遺物	25
第5節 近世以降の遺構と遺物	27
第6節 その他の遺物	34
第4章 自然科学分析	
第1節 六条下所遺跡の花粉分析	35
第2節 六条下所遺跡から出土した大型植物遺体	39
第3節 六条下所遺跡のテフラ分析	41
第5章 総括	46

# 挿図目次

第1図	調査位置図	1
第2図	周辺遺跡位置図	4
第3図	高松平野遺跡位置図	5
第4図	調査区割図	7
第5図	1区 南壁断面図	8
第6図	1区 北壁・2区 SD2001・SD2002 南側東端断面図	9
第7図	2区 北壁断面図	10
第8図	3区 北壁・南壁断面図	11
第9図	3区 西壁・東壁 SX3003・南壁断面図	12
第10図	遺構配置図(1区下位遺構)	13
第11図	遺構配置図(1区上位遺構)	14
第12図	1区 遺構配置図(下位遺構)	15
第13図	1区 遺構配置図(上位遺構)	16
第14図	2区 遺構配置図	17
第15図	3区 遺構配置図	18
第16図	SR1001 断面図	19
第17図	SR1001 断面図	20
第18図	SD1012・SD1013・SD1014・SD2003 断面図	21
第19図	SR・SD 出土遺物実測図	22
第20図	SD2001・SD2002・SD3002・D3007 断面図 SD2001 出土遺物実測図	23
第21図	地割れ状遺構平面図	24
第22図	1区 地割れ状遺構断面図・SX3002 平・断面図	25
第23図	SD3001・SD3003～SD3007・SD3009 断面図	26
第24図	SD3001・SD3003・SD3004 出土遺物実測図	27
第25図	SB1001・SA1003 平面図	28
第26図	SB1001・SA1001 断面図	29
第27図	SB1003 平・断面図・SD1003・SD1004・ SD1005・SD1007・SD1009 断面図	30
第28図	SK1001・SK1002・SK1004・SK1006・ SK2001・SK2002・SK2003 平・断面図・ SK3004 出土遺物実測図	31
第29図	SP 平・断面図	32
第30図	SX3001 平・断面図・SX3003 道構外出土遺物実測図	33
第31図	六条下所遺跡における花粉分布図	37
第32図	下層確認トレチの テフラ分析試料の採取位置	41
第33図	テフラ分析試料の採取層準の柱状図	42
第34図	テフラ試料の含水率・ 含砂率・鉱物組成の分布図	43
第35図	火山ガラスの屈折率測定結果	43
第36図	時期別道構配置図 (弥生時代前期以前～弥生時代前期後半)	47
第37図	弥生時代前期の自然流路と溝	48
第38図	時期別道構配置図(中世～近世)	49

# 写真目次

写真1	分析試料の断面画像	35
写真2	産出した花粉化石	38
写真3	六条下所遺跡から出土した大型植物遺体	39
写真4	火山灰分析試料の断面写真	41
写真5	テフラ試料中の粒子の顕微鏡写真	45
写真6	1区 遺構検出状況(西から)	53
写真7	1区 全景(北東から)	53
写真8	1区 全景(東から)	53
写真9	1区 SB1001(南から)	54
写真10	1区 SB1001-SP1064 断面(東から)	54
写真11	1区 SB1001-SP1065 断面(東から)	54
写真12	1区 SR1001 流路 A-D 検出状況(北西から)	55
写真13	1区 SD1012 断面(南から)	55
写真14	1区 SD1013 断面(南から)	55
写真15	1区 SD1013 弥生土器出土状況(南から)	56
写真16	1区 SD1014(南から)	56
写真17	1区 調査状況(東から)	56
写真18	1区 SR1001 流路 A-D 調査状況(南から)	57
写真19	1区 SR1001 石器出土状況	57
写真20	1区 SR1001 断面(南東から)	57
写真21	1区 SR1001 断面(南東から)	58
写真22	1区 SR1001 流路 A-B(南から)	58
写真23	1区 SR1001 流路 A-D(北から)	58
写真24	1区 地割れ状道構検出状況(東から)	59
写真25	1区 地割れ状道構(東から)	59
写真26	1区 SR1001 下層断面(東から)	59
写真27	1区 基盤層剥片出土状況(南から)	60
写真28	2区 全景(南から)	60
写真29	2区 北壁断面(南東から)	60
写真30	2区 SK2002-SK2003 断面(南から)	61
写真31	2区 SD2001・SD2002(南から)	61
写真32	2区 SD2001・SD2002 断面(北から)	61
写真33	3区 全景(南から)	62
写真34	3区 SD3004 断面(南から)	62
写真35	3区 SD3004 土師質土器 出土状況(南西から)	62
写真36	3区 SD3007 断面(北から)	63
写真37	3区 SD3009 断面(南から)	63
写真38	発掘体験	63
写真39	六条下所遺跡出土遺物 1	64
写真40	六条下所遺跡出土遺物 2	65

## 表 目 次

第1表 平成27年度発掘調査体制一覧	2
表2表 令和元年度整理作業体制一覧	2
第3表 分析試料一覧	35
第4表 産出花粉胞子一覧表	36
第5表 大型植物遺体	39
第6表 テフラ分析試料の詳細	41
第7表 テフラ試料の湿式部分け・重液分離の結果	42
第8表 藍残渣中の遺物組成	43
第9表 六条下所遺跡出土土器觀察表	51
第10表 六条下所遺跡出土石器觀察表	52



## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課では、県道太田上町志度線道路改築に伴い、平成26年度（2014年）に香川県高松市六条町で試掘調査を実施した。その結果、対象地の一部（1,934m<sup>2</sup>）で遺構、遺物を確認したため、この範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地「六条下所遺跡」に含め、適切な保護を図ることとした（香川県教育委員会編 2016）。その後、県道予定地内の六条下所遺跡については、香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課と香川県高松土木事務所との間で協議が進められ、平成27年度（2015～2016年）に香川県埋蔵文化財センターが本発掘調査を実施した。

### 第2節 発掘作業と整理作業の経過

発掘作業は直営方式で実施した。調査面積は1,934m<sup>2</sup>、調査期間は2015年11月1日～2016年3月31日である（第1表）。また、2015年11月27日には発掘体験講座「発掘してみよう」を開催した。発



第1図 調査地位置図

掘体験講座の参加者は小・中学生 11 名である。

整理作業は 2019 年 4・5 月、2020 年 1～3 月に実施した。花粉分析と火山灰分析については株式会社パレオ・ラボに委託した。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

**第1表 平成 27 年度発掘調査体制一覧**

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
総括 課長 増田 安	総括 所長 真鍋 昌宏
副課長 小柳 和也	次長 前田 和也
総務・生涯学習推進グループ 課長補佐 愛染伊知朋	総務課 課長（兼）
副主幹 松下由美子	主任 寺岡 仁美
主事 和木 麻佳	主任 高木 秀哉
文化財グループ 課長補佐 片桐 孝浩	主任 中川 美江
主任文化財専門員 山下 平重	主任 岩崎 昌平
文化財専門員 乗松 真也	主任文化財専門員 森下 英治
	文化財専門員 小野 秀幸
	調査課

**第2表 令和元年度整理作業体制一覧**

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
総括 課長 原田 智	総括 所長 西岡 連哉
副課長 片桐 孝浩	次長 石野 高雄
総務・生涯学習推進グループ 課長補佐 中川 啓朋	総務課 課長（兼）
副主幹 長谷川江里	副主幹 斎藤 政好
主事 辻 おしえ	主任 高橋 篤行
文化財グループ 課長補佐（兼） 片桐 孝浩	主任 丸尾麻知子
主任文化財専門員 松本 和彦	主任 横井 隆史
文化財専門員 真鍋 貴匡	主任 寺尾 一夫
	資料普及課 講長 古野 徳久
	主任文化財専門員 乗松 真也

#### 参考文献

香川県教育委員会編 2016 『埋蔵文化財試掘調査報告 X X V』 平成 26 年度香川県内遺跡発掘調査 香川県教育委員会

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

六条下所遺跡は香川県高松市六条町に所在する。

香川県は四国の北東部の一角を占め、四国島の一部と瀬戸内海上の島嶼部で構成されている。県南端部では讃岐山脈が東西に伸び、山脈の稜線がほぼ徳島県との県境となる。高松市は高松平野を中心とした範囲を市域とし、東西に長い香川県のはば中央に位置する。香川県の県庁所在地で、2020年1月時点の面積は約375km<sup>2</sup>、人口は約419,000人である。

高松平野は、北は瀬戸内海に面し、南は讃岐山脈によって画され、約200m前後の丘陵と400m前後の連峰によって東西を挟まれる。平野内には石清尾山や由良山等の独立丘陵が点在する。讃岐山脈から派生する山地や丘陵からは複数の河川が瀬戸内海に向かって流下し、扇状地形の平野を形成する。

高松平野で最大規模の香東川の流路は、現在でこそ石清尾山の西麓にしかみられないが、中世以前には海岸線から約8kmさかのほった地点で分岐し、石清尾山の東麓にも流れていた。特に、旧流路右岸の広い範囲では、香東川からは派生する支流がいくつも流下していたと考えられ、御坊川等がその痕跡とされる。また、香東川右岸を錯綜するこれらの支流や低地に囲まれた微高地が平野内に網目状に分布していたとみられる。平野東部では、香東川とは源流を異にする古川、春日川、新川が流下する。六条下所遺跡は古川左岸に立地する。中世以前の海岸線は、高松平野東部で大きく湾入するよう復元され（古・高松湾）、春日川や新川の河口付近には湿地が広がっていたと思われる。古・高松湾は近世に埋め立てられ、四国島と屋島はこの段階で陸続きとなつた。

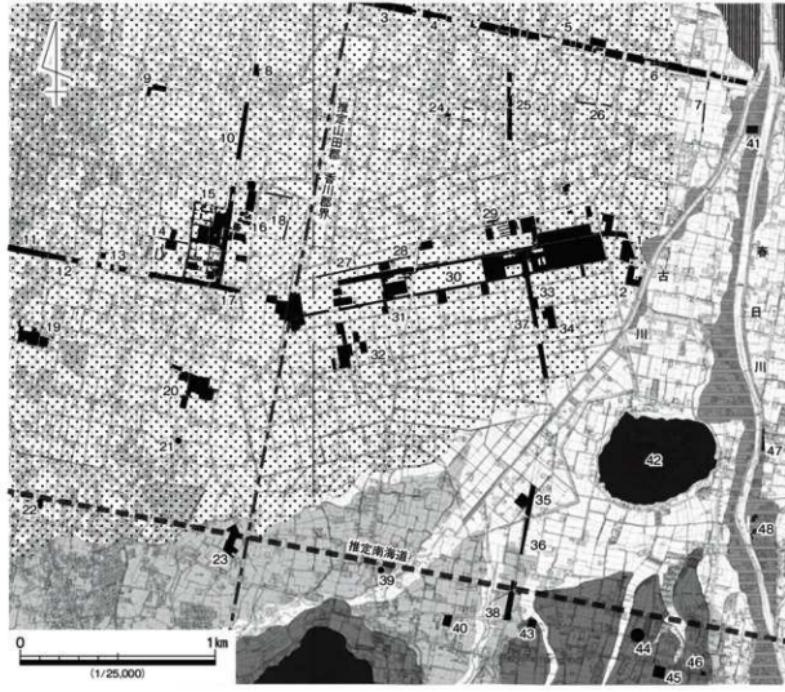
### 第2節 歴史的環境

旧石器時代では、南方の日山から伸びる段丘上の横内東遺跡で五色台産サスカイト製とみられるナイフ形石器が出土している。縄文時代晩期後半の遺物は多肥宮尻遺跡の自然河川で確認されている。本遺跡から北方約1kmにある林・坊城遺跡の自然河川では、晩期後半の突帯文土器に一本鋤や打製石斧といった農耕に関わる遺物が伴う。

弥生時代前期には本遺跡から北西約2.5kmの汲仏遺跡で環濠集落が出現する。このほか、高松平野での環濠集落は本津川下流左岸の鬼無藤井遺跡、旧香東川下流域の天満・宮西遺跡でも認められる。汲仏遺跡、天満・宮西遺跡の環濠集落は前期前半に出現し、前期後半まで継続する。鬼無藤井遺跡の環濠集落の時期は前期後半である。高松平野では、弥生時代前期の遺物を伴う遺跡の確認例は増加しているが、環濠集落のような居住痕跡の遺構の分布は不鮮明である。近年調査された香東川中流域右岸の北口遺跡（前期後半）では、平面形円形で窪みをもち、内部に柱穴とみられる遺構が複数確認されている。さぬき市の鴨部・川田遺跡でも類似する遺構が検出されており、こうした遺構が明確な竪穴建物の構造を伴わない居住遺構の可能性がある。なお、北口遺跡は、当該期の掘立柱建物数棟も検出されていることから、高松平野での環濠集落以外の居住域とみなすことができる。明瞭な畦畔を備える水田は、本遺跡から約2km北西のさこ・長池遺跡からさこ・長池Ⅱ遺跡にかけて2単位確認されている。いずれも

前期後半で、等高線に直交する幹線小畦畔に沿って長方形に近い区画が並ぶ。さらに北方に位置する前期前半とみられる上西原遺跡の水田も同様の区画形状をとっている。一方、南西約1.5kmにある北野遺跡の前期前半の水田の区画形状はやや異なる。この点については北野遺跡の水田が自然河川の屈曲部付近に形成されたためと考えられている。さこ・長池、さこ・長池Ⅱ遺跡の水田は微高地に形成され、排水先である自然河川に接する。縄文時代後半の自然河川はこの時期にも活発に活動しているとみられ、高松平野ではこうした自然河川を利用した排水計画のもとに水田が営まれた可能性がある。

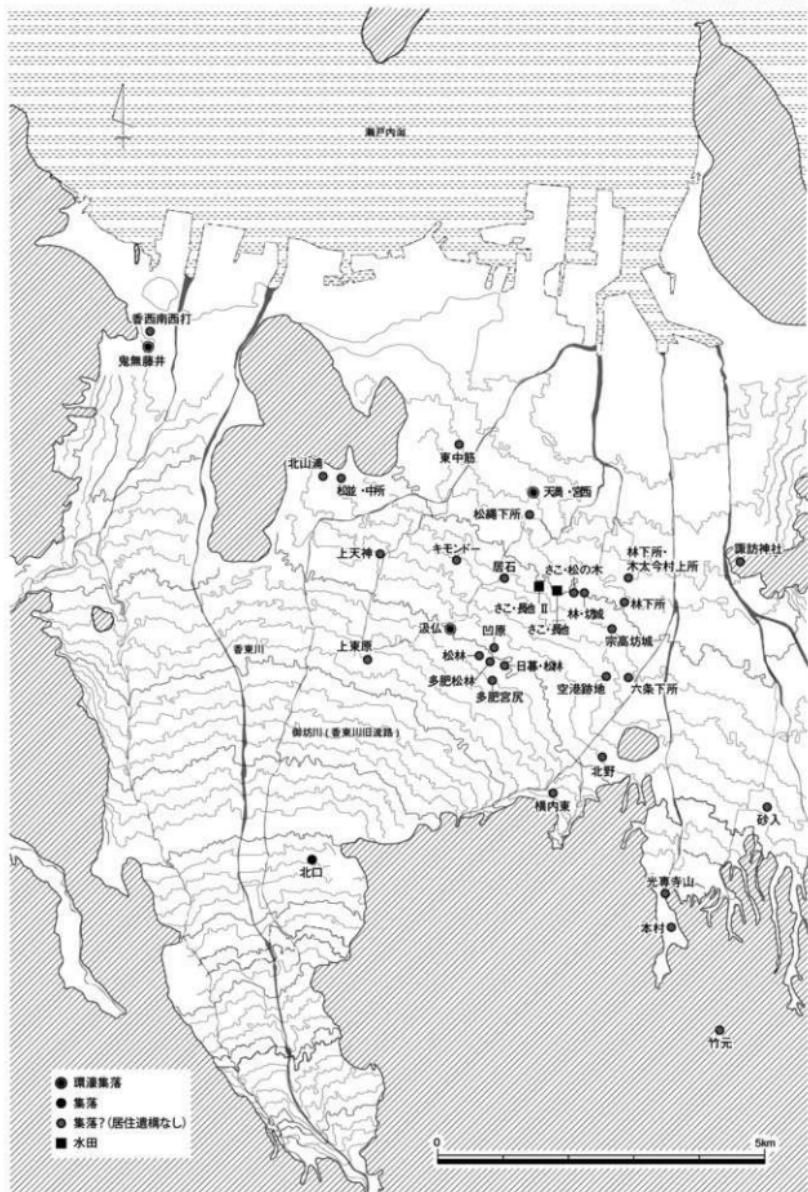
弥生時代中期中葉には平野全体に遺跡が点在する。本遺跡から約2km西に位置する多肥松林遺跡では、微高地間の自然河川から出土した未成品を含む多量の木器から、集落内での木器製作が推測されている。また、以前は不明瞭であった中期の墓域の確実な例として本遺跡から西方約3kmに位置する太田原高州遺跡がある。太田原高州遺跡では、中期末の平面形方形の区画墓群が構築され、一部の主体部



- 1. 六条下所遺跡 2. 六条上青木道跡 3. さこ・長池道跡 4. さこ・松ノ木道跡 5. 林・坊城道跡 6. 六条・上所道跡 7. 六条上川西道跡
- 8. 多肥下町下所道跡 9. 久保道跡 10. 巴原道跡 11. 多肥北原西道跡 12. 多肥北原東道跡 13. 多肥平塚道跡 14. 松林道跡 15. 多肥松林道跡
- 16. 日置・松林道跡 17. 多肥宮尻道跡 18. 油之内道跡 19. 西久保道跡 20. 宮郷道跡 21. 天高宮古墳 22. 横市道跡 23. 岸作道跡 24. 林宗高道跡
- 25. 宗高坊城道跡 26. 六条西村道跡 27. 宮西・一角道跡 28. 一角道跡 29. 公務員宿舎道跡 30. 空港跡地道跡 31. 上林本村道跡 32. 挿藤庵寺
- 33. 中林道跡 34. 竹部道跡 35. 北野通跡 36. 猪野西道跡 37. 上林通跡 38. 三谷中原道跡 39. 加摩羅神社古墳 40. 横内東道跡
- 41. 六条城跡 42. 由良山城跡 43. 猪野城跡 44. 高野丸山古墳 45. 高野庵寺 46. 川島本町山田道跡 47. 大瀬道跡 48. 由良南原道跡

(高松市都市計画図「太田」・「林」・「弘生山」・「三谷」に一部加筆)

第2図 周辺遺跡位置図



第3図 高松平野遺跡位置図

には副葬品と考えられる玉が伴う。このうち水晶製算盤玉は日本海沿岸の丹後半島産とみられている。

弥生時代後期にはさらに遺跡数が増加する。この時期の高松平野では細粒かつ多量の角閃石を含む胎土と精緻な器形を特徴とする香東川下流域産土器が成立する。香東川下流域産土器製作地の中心は、香東川流域の石清尾山南側一帯とされている。一方、集落とともに粘土採掘坑が検出された空港跡地遺跡では、明橙色～橙白色の胎土で、香東川下流域産土器とは異なる器形の白色系土器の製作が推測されている。このほかにも平野東端丘陵部付近等を推定製作地とする土器等、この時期の高松平野では複数の土器群の存在が明らかとななりつつある。また、林・坊城遺跡では、平面形円形の周溝墓3基が近接して築かれている。

古墳時代前期前半には、主体部等は不明ながらも、空港跡地遺跡で前方後円形、前方後方形の周溝墓が確認されている。古墳時代中期初頭の築造とされる三谷石舟古墳は墳丘長約80mの前方後円墳で、同時期の前方後円墳としては香川県内最大規模である。高松平野西部の鷺ノ山で産出する角閃石安山岩を用いた刳抜式石棺を埋葬施設とする。墳丘直径40mと推定される円墳の高野丸山古墳は中期の築造と考えられている。空港跡地遺跡では5世紀末の竈を伴う堅穴建物が検出されているが、この直後の時期の竈をもつ堅穴建物はわずかである。7世紀前葉～中葉には、多肥北原遺跡や多肥北原西遺跡等、高松平野中央部で堅穴建物が密集する集落が形成される。これらの堅穴建物は基本的に竈を備えており、当該期を高松平野での竈の普及期とすれば、竈が広く普及するまでには時間を要したことになる。

本遺跡は、古代讃岐国の山田郡11郷のうち、林郷に属していたと考えられる。高松平野にはN9°～11°E方向の条里地割が広がり、春日川及び古川左岸の自然堤防帯や扇状地帯にも認められる。三谷中原遺跡では8世紀前半以前の条里方向の溝が、空港跡地遺跡でも8世紀の条里方向に合致する溝が確認されており、当該地域では条里施工は8世紀までには行われたと判断される。官道である南海道の推定路線は、讃岐国内を阿波国境から伊予国境までは東西に横断する。条里地割が展開する平野では歴史地理学の手法により余剰帶が見い出され、この余剰帶が南海道の痕跡と推定された。高松平野では、平野南部を南海道の路線がほぼ直線に復元され、その推定路線が三谷郷北部を通過する。讃岐国内の南海道沿いには6の駅家が設置され、このうちのひとつである三谿駅家の位置は、地名から三谷郷内に求められる。南海道推定路線内にある三谷中原遺跡では、L字状に屈曲する溝が2本検出された。2本の溝の南北軸が描うにも関わらず、それぞれの溝は北から西へ、南から東へと屈曲する。13mある東西方向の溝間に南海道の路盤の存在が推定されている。隣接する香川郡では、南海道が起点と考えられる幅員9mの南北方向の道路と、それに直交する幅員6mの東西方向の道路が検出されている（多肥北原西遺跡、太田原高州遺跡）。東西道路は延長約1kmに達し、多肥廢寺の近傍を通過する。

本遺跡の西にある空港跡地遺跡（I地区）では近世の掘立柱建物群が確認されている。建物は數か所に集中して分布することから、田畠の中に点在する居住域といった景観を復元し得る。

本遺跡の所在地は、近世～近代初頭の六条村の範囲に含まれる。六条村は、町村制施行後の1890年（明治23）に隣接する林村に含まれ、1956年（昭和31）には高松市六条町となった（註1）。

註

1 歴史的環境は、乗松（2020）を一部修正したものである。

参考文献

乗松真也 2020「遺跡の位置と環境」香川県埋蔵文化財センター編『県道中郷三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 北野遺跡・鎌野西遺跡』香川県埋蔵文化財センター pp.4-7

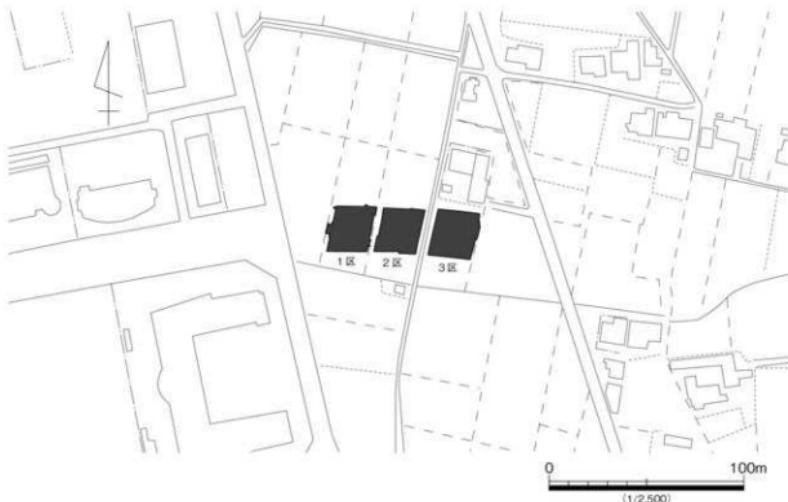
## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

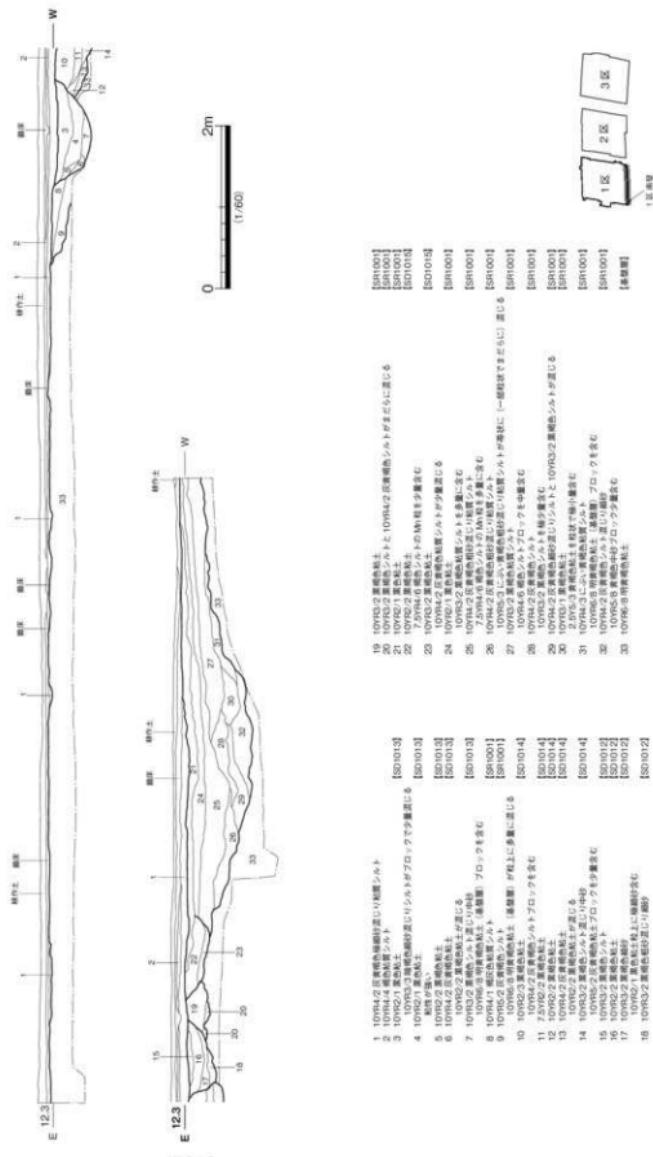
東西に長い調査対象地内を横断する道路や水路等の土地区画に応じて調査区を設定した。調査区は西から順に、1～3区とした。

### 第2節 層位

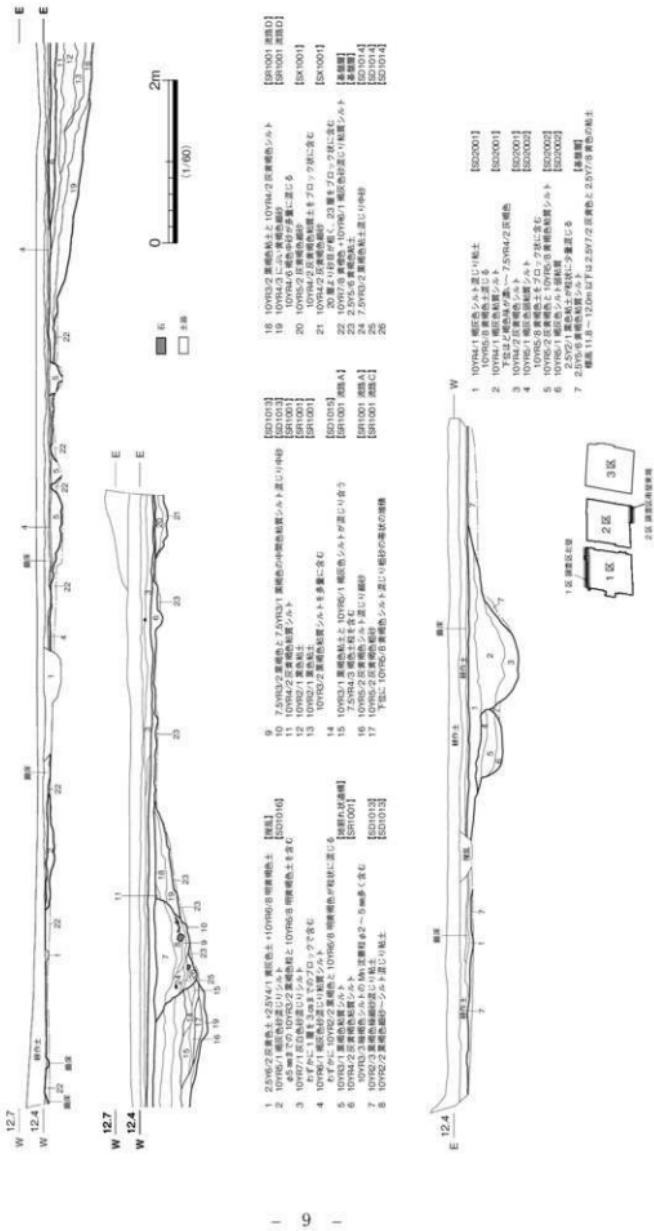
1～3区とも耕作土、鋤床とそれに近い層の下位に明黄褐色粘土層が堆積する。基本的には明黄褐色粘土層上面を遺構検出面とし、遺構検出面は1～3区かけてやや標高を下げる。1区西端から3区東端までの約75mでの東西端における標高差は約20cmである。現地表面の標高も、調査対象地の東方約200mを流下する古川に向かって少しづつ下がっており、この点は旧地形が反映されているものと考えられる。明黄褐色粘土層は、縄文時代の複数の流路（第16図流路I～V）で構成される。



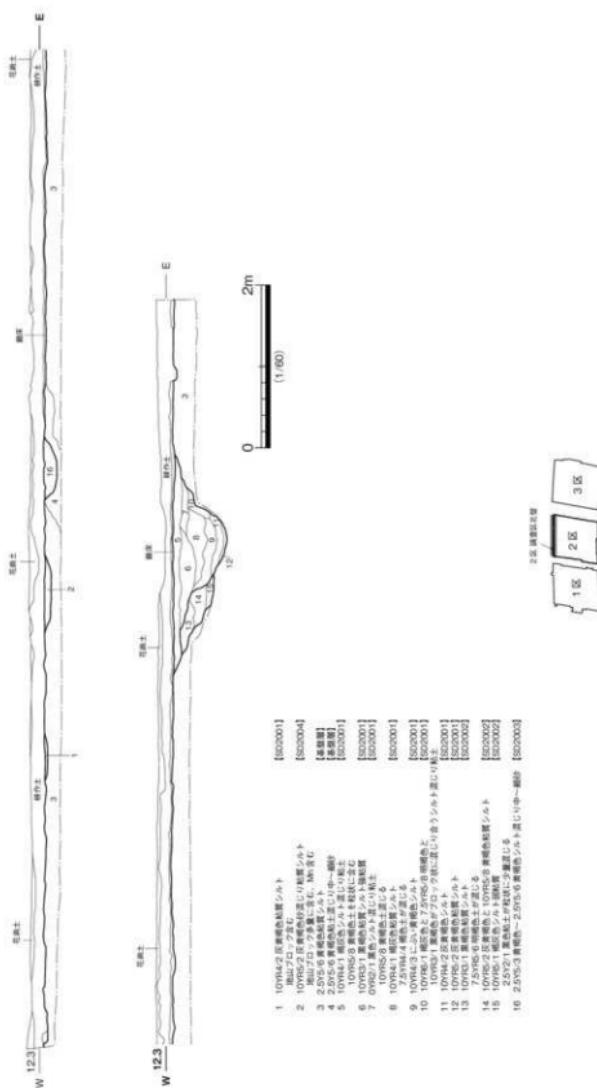
第4図 調査区割図



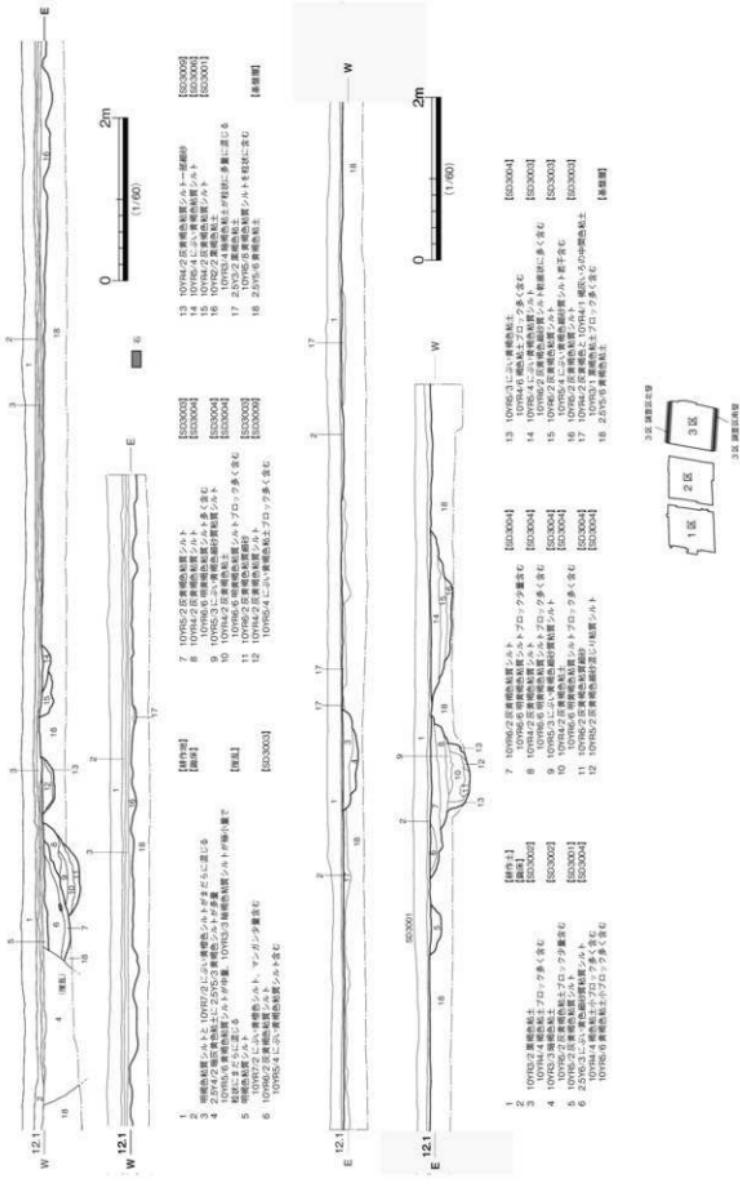
第5図 1区南壁断面図



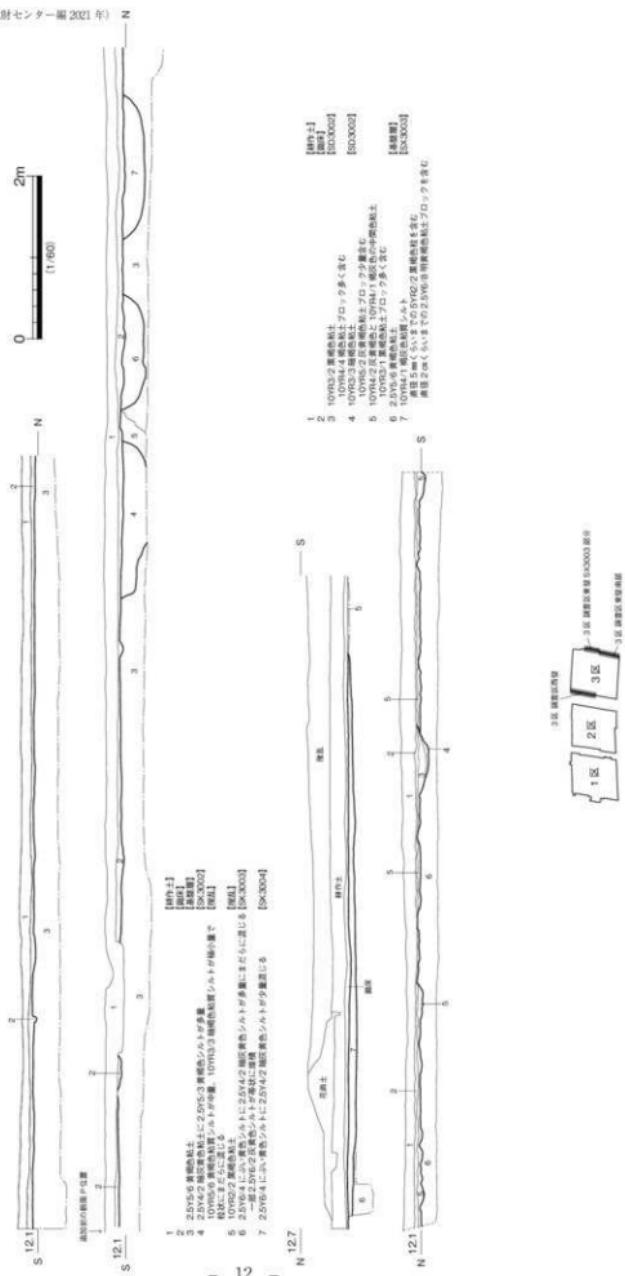
第6図 1区北壁・2区SD2001・SD2002南側東端断面図



第7図 2区北壁断面図

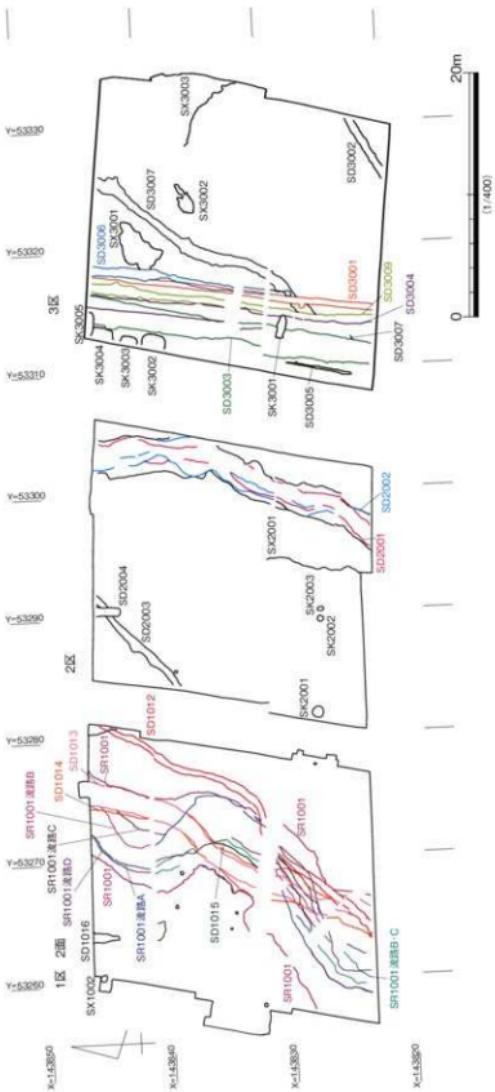


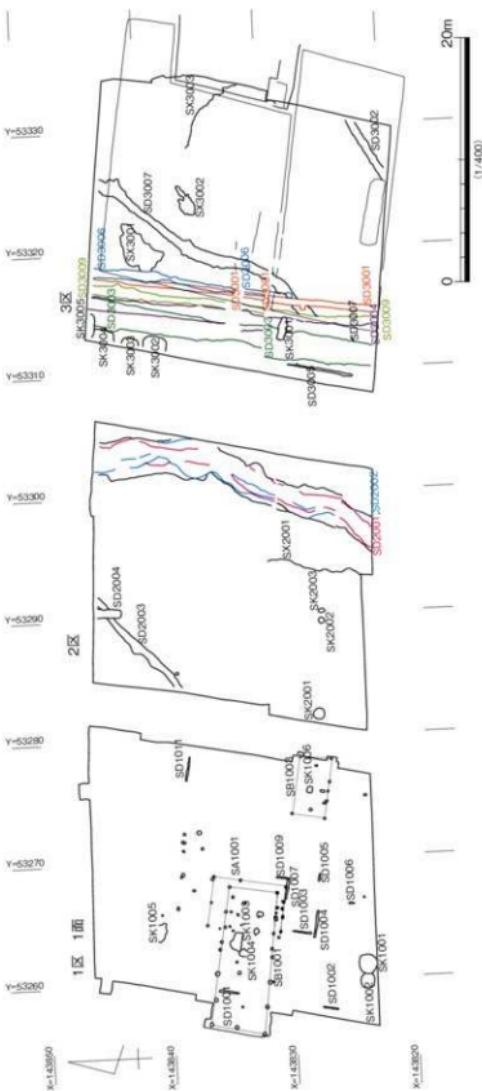
第8図 3区北壁・南壁断面図



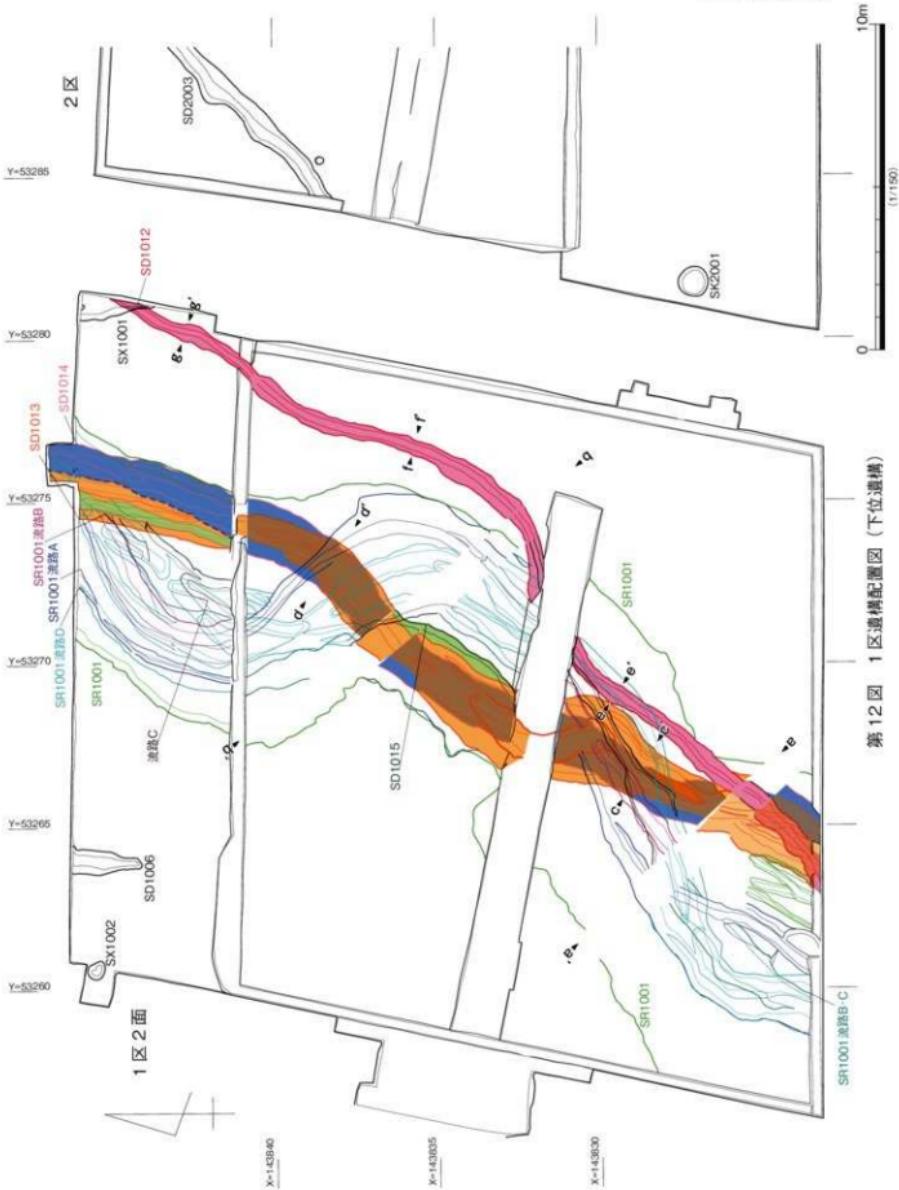
第9図 3区 西壁・東壁 SX30003・南壁断面図

第10図 遺構配置図(1区下位遺構)

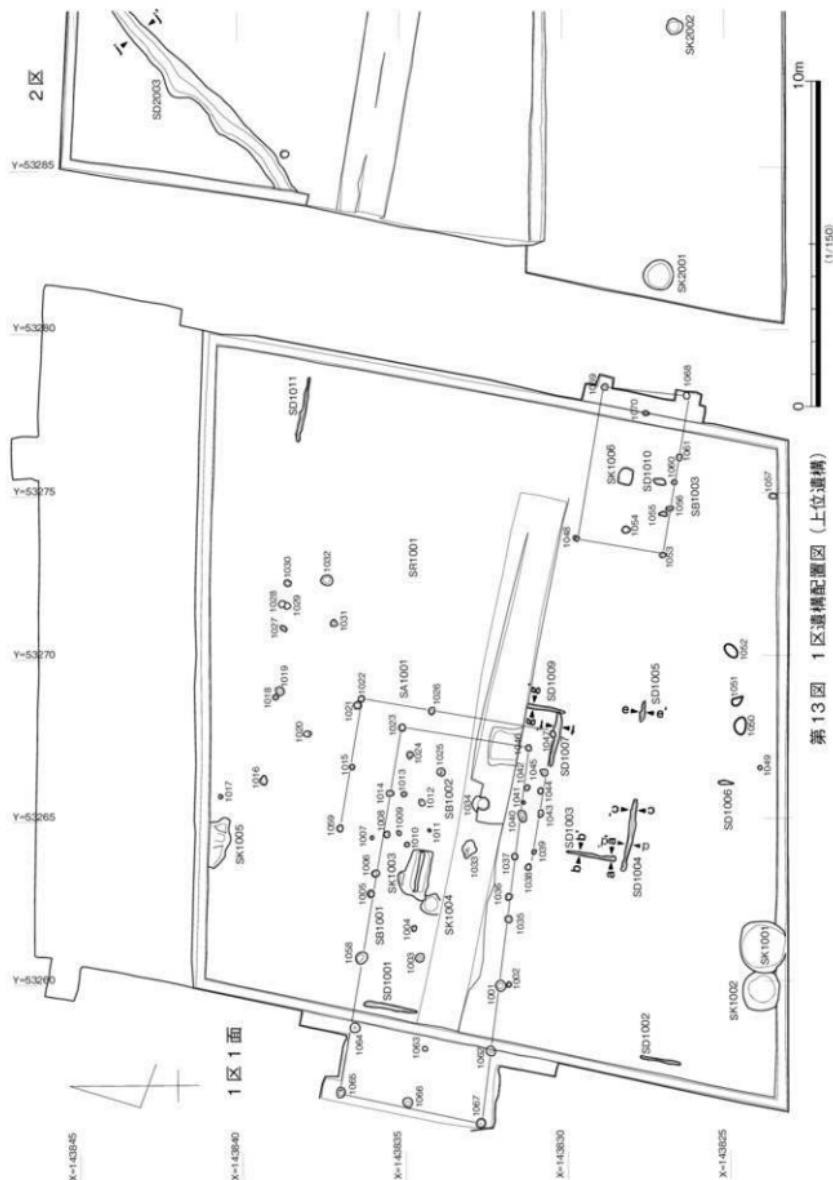




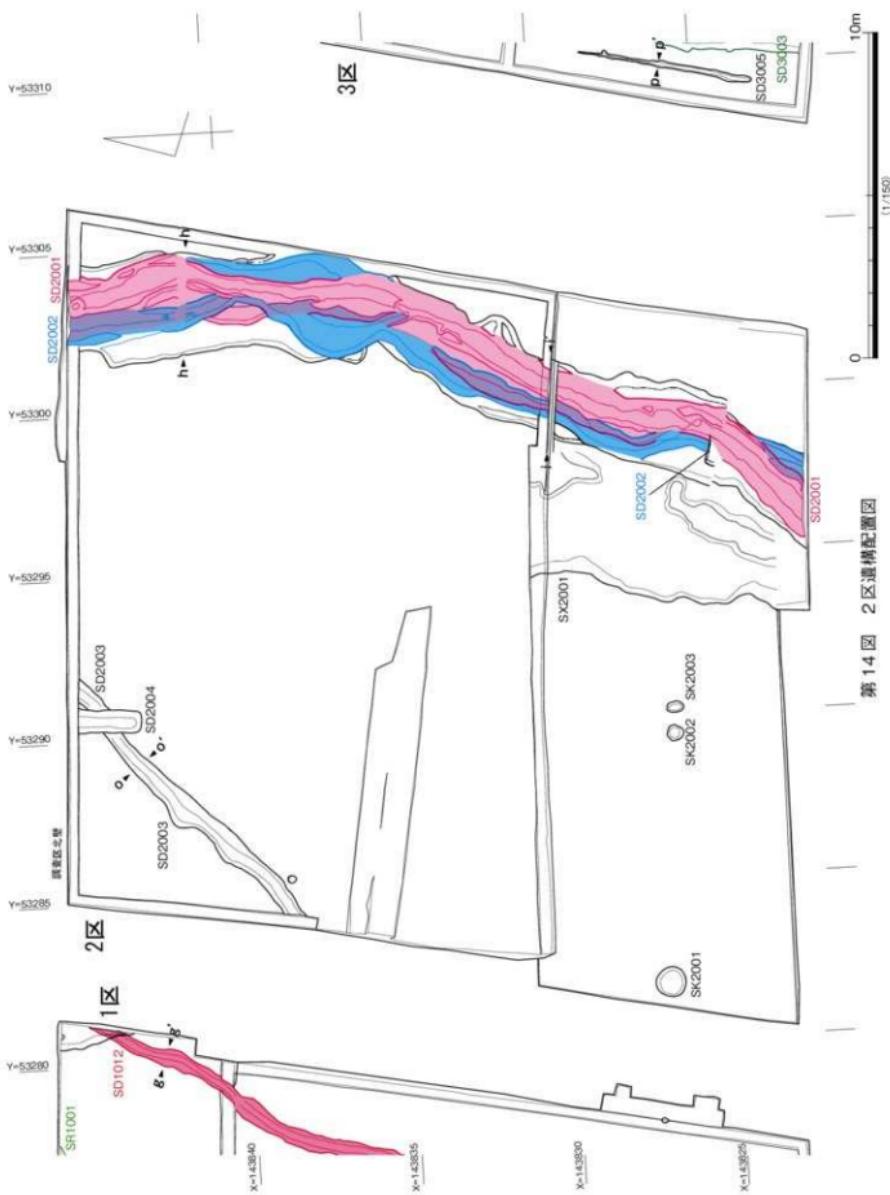
第11図 遺構配置図（1区上位遺構）



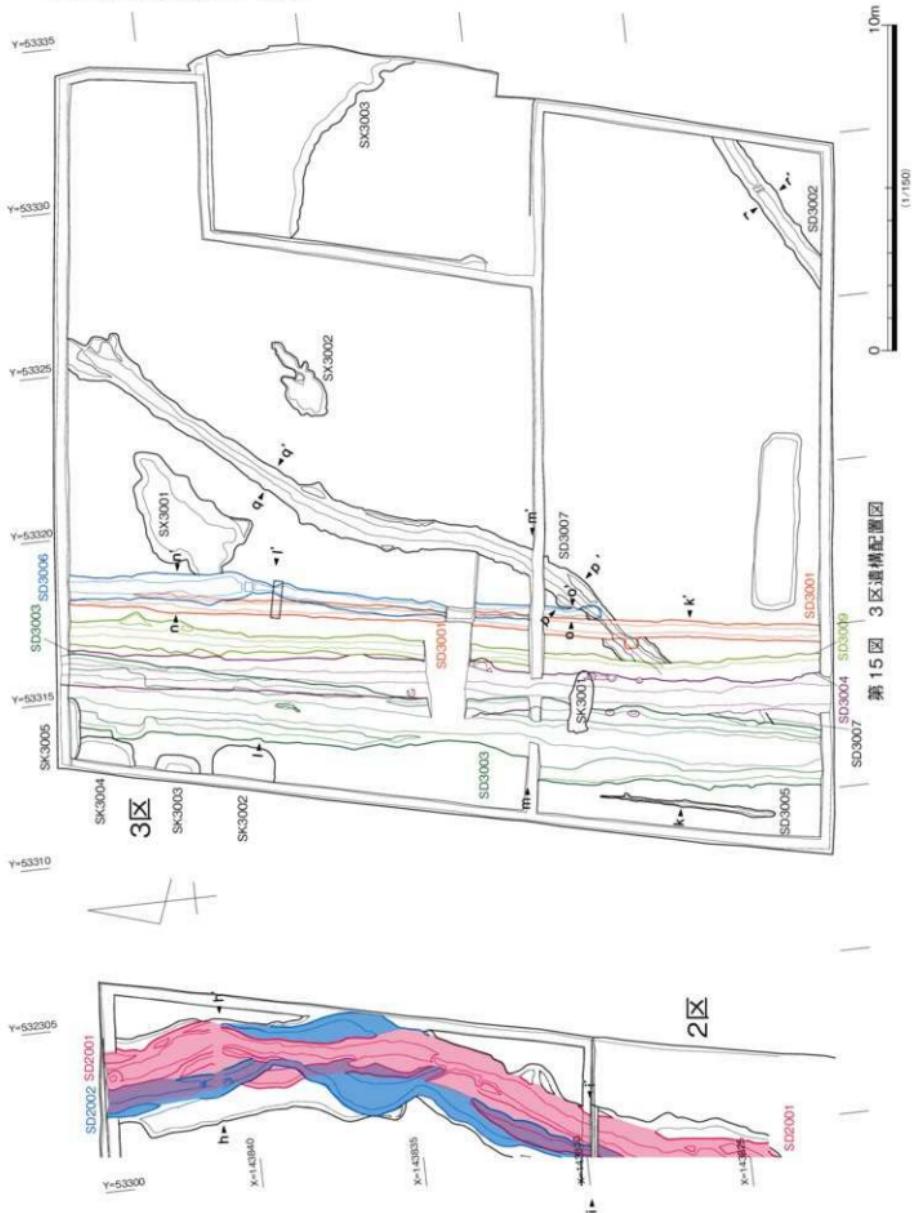
六条下所遺跡（香川県埋蔵文化財センター編 2021年）

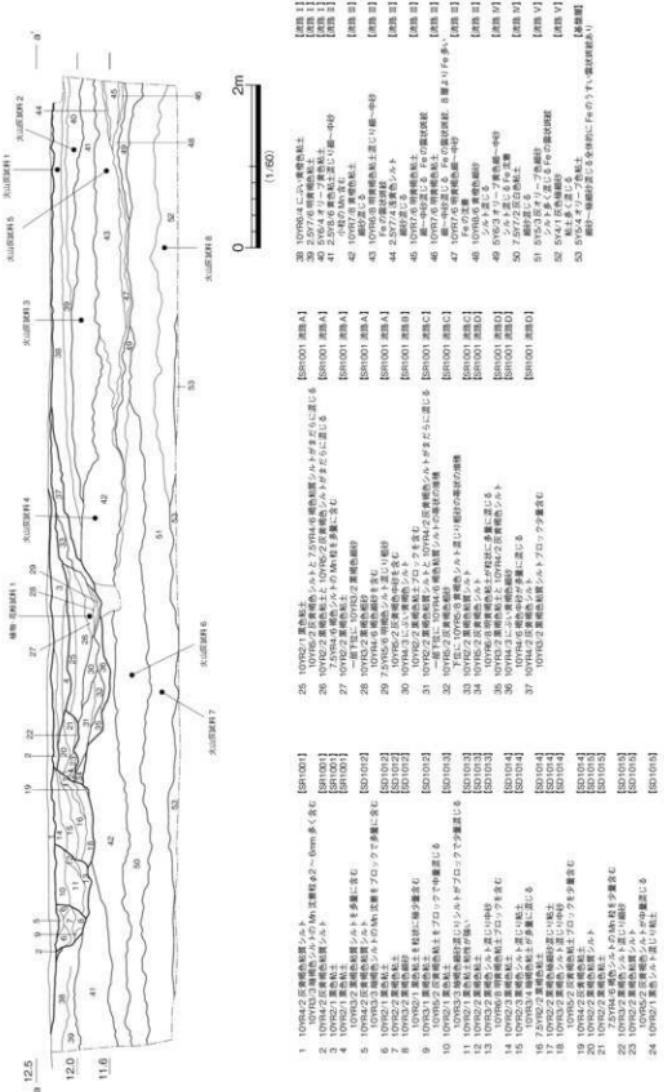


第13回 1区遺構配置図（上位遺構）



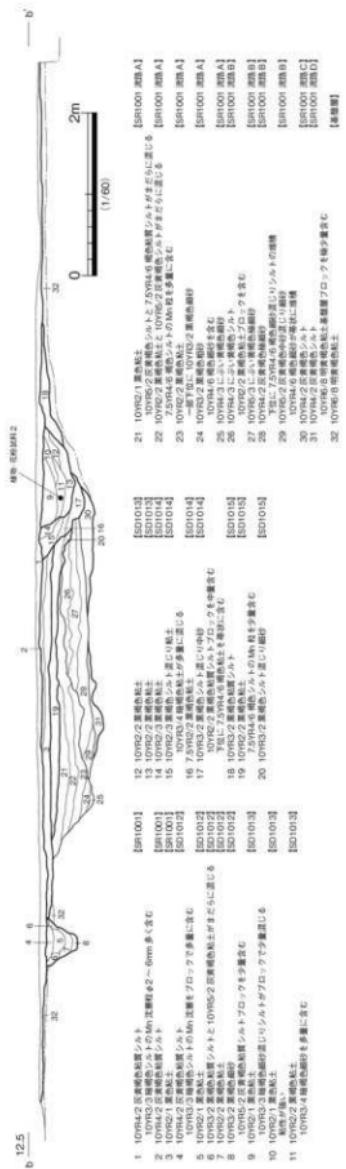
第14図 2区連携配置図

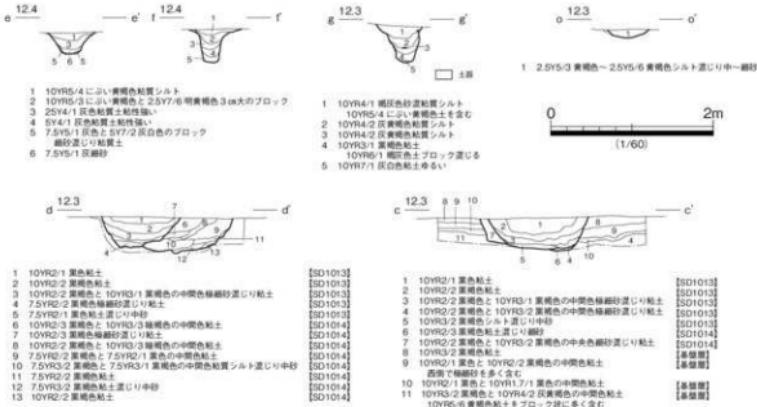




第16図 SR1001断面図 1

六条下所通路（香川県埋蔵文化財センター編 2021年）





第18図 SD1012・SD1013・SD1014・SD2003断面図

### 第3節 弥生時代以前の遺構と遺物

#### 溝・自然流路

SR1001 流路 A ~ D, SR1001, SD1012 ~ 1015 · 2003

1区南西部から1区北東部にかけて流下する溝である。これらの下位には弥生時代の大きな流路と考えられる層（流路 I ~ V）が堆積する。

溝の堆積順は、SR1001 流路 D → SR1001 流路 C → SR1001 流路 B → SR1001 流路 A → SD1015 → SR1001 → SD1014 → SD1013 → SD1012、となっている。

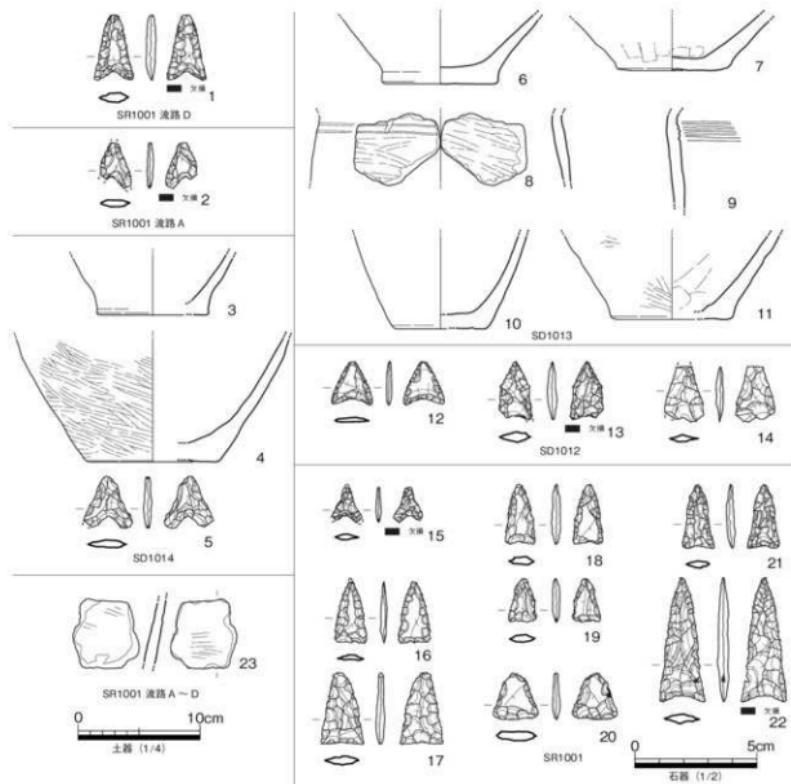
SD1012 ~ 1015は、底面からの立ち上がりが比較的急で水路と推測される。SR1001 流路 A ~ D がある程度埋没して形成された窪地を利用して SD1015が設けられたと考えられる。SD1015とその上位の SR1001 が埋没し、さらに浅い窪地に順に築かれたのが SD1013・1014 である。SD1013・1014 の断面は逆台形状を呈し、底面付近には流水の痕跡が確認できる（c-c' 5層、d-d' 10・12層）。SD1014・1015が埋没した後、一部は場所を違えて SD1012が掘削される。SD1012は、1区南端部中央からかぎ状に曲がって1区北東角にかけて流下する。底面からの立ち上がり角度は比較的急である。底面付近の一部に流水の痕跡が認められ（e-e' 6層）、最終的には埋め戻されたと推察される（f-f' 2層）。

2区で検出された SD2003 も南西 - 北東に流下することから、1区の SD1012 ~ 1015 から派生する水路であった蓋然性が高い。

SR1001 流路 D 出土遺物 1はサスカイト製石鎌である。

SR1001 流路 A 出土遺物 2はサスカイト製石鎌である。

SD1014 出土遺物 3・4は前期の弥生土器底部である。5はサスカイト製石鎌である。



第19図 SR・SD出土遺物実測図

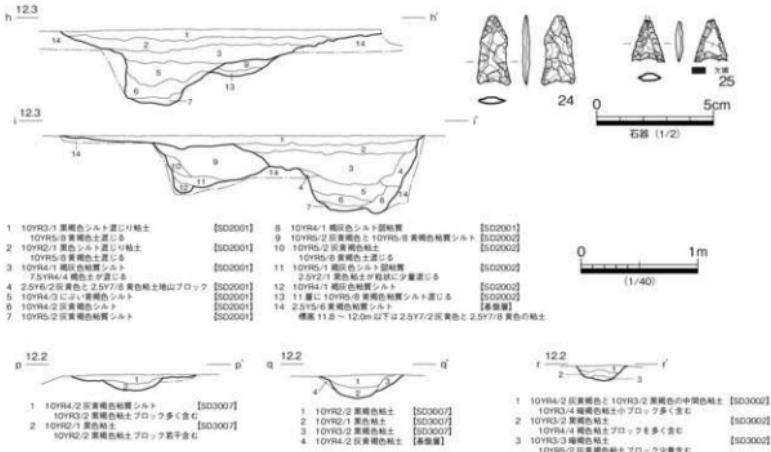
SD1013出土遺物 6・7・11は前期の弥生土器壺底部、8～10は弥生土器壺である。8・9にはそれぞれ2・4条のヘラ書き沈線が施される。

SD1012出土遺物 12～14は凹基式のサスカイト製石鎌である。

SR1001出土遺物 15～22はサヌカイト製石鎌で、15・18・21・22が凹基式、16・17・19・20が平基式である。

SR1001流路A～D出土遺物 SR1001流路A～Dのいずれかから縄文土器深鉢23が出土した。

時期 9からSD1013は弥生時代前期後半（前期IIa、森下1998）と判断できる。近似する埋立ではほぼ同地点にあるSD1012・1014・1015・2003、SR1001も近い時期と考えられる。SR1001流路A～Dは縄文時代（後期～晩期か）から弥生時代前期後半の間に位置付けられる。流路I～Vは、それ以前の埋没と判断される。



第20図 SD2001・SD2002・SD3002・SD3007断面図・SD2001出土遺物実測図

## SD2001・2002

2区東部を、やや蛇行しながら南北方向に流下する溝である。先行するSD2002は、しばらく機能した後、基盤層に近いブロックを含む土（9層）で埋め戻された可能性がある。SD2002埋没後にSD2001が開削される。SD2001も最終的には埋め戻されたとみられる（1～4層）。

SD2001出土遺物 24・25は凹基式のサスカイト製石鏡である。

時期 灰褐色～黒褐色系の埋土がSD1012～1015等に類似する点から弥生時代前期としておく。なお、流下方向が条里方向と合致しないため7世紀以前であることは確実である。

## SD3002・3007

SD3002は3区南西部から北東方向に流下する溝である。3区南東隅に位置するSD3007も流下方向は南西・北東を示す。位置関係からみて、いずれもSD2001・2002より派生した溝の可能性がある。遺物は出土していない。

時期 黒褐色系の埋土がSD1012～1015等と近いため、弥生時代前期と考えられる。

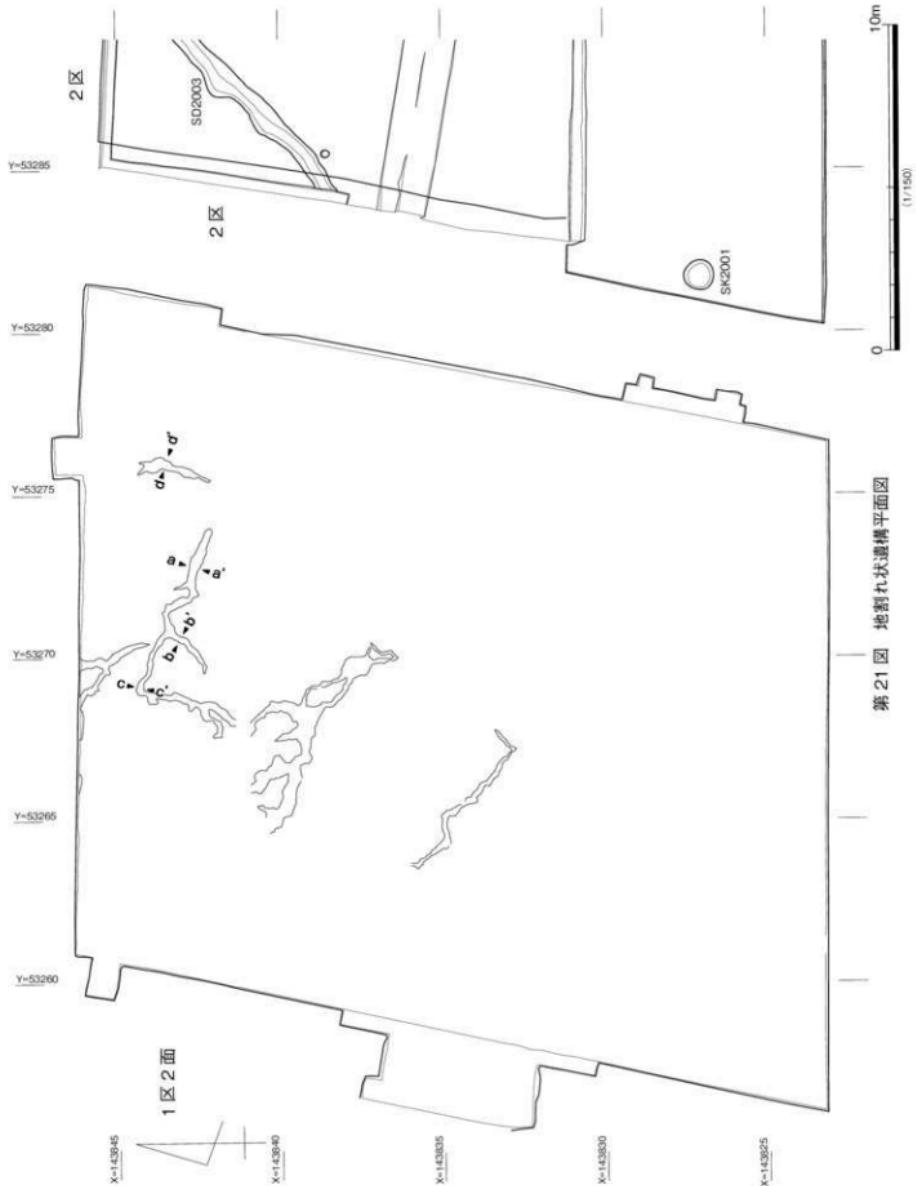
## その他

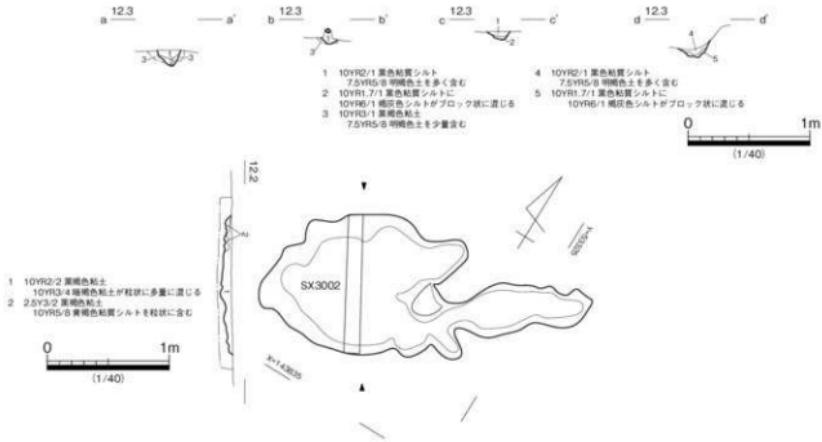
## SX3002

3区東部で検出した平面形不定形の落ち込み状遺構である。遺物は出土していない。

時期 埋土から弥生時代前期としておく。

## 地割れ状遺構





第22図 1区 地割れ状遺構断面図・SX3002 平・断面図

1区北半部のSR1001流路A～D下面で検出した網目状の遺構である。地割れを示す可能性を考えて、地割れ状遺構とした。遺物は出土していない。

時期 SR1001流路A～Dに先行するため、弥生時代前期後半以前だろう。

#### 第4節 中世の遺構と遺物

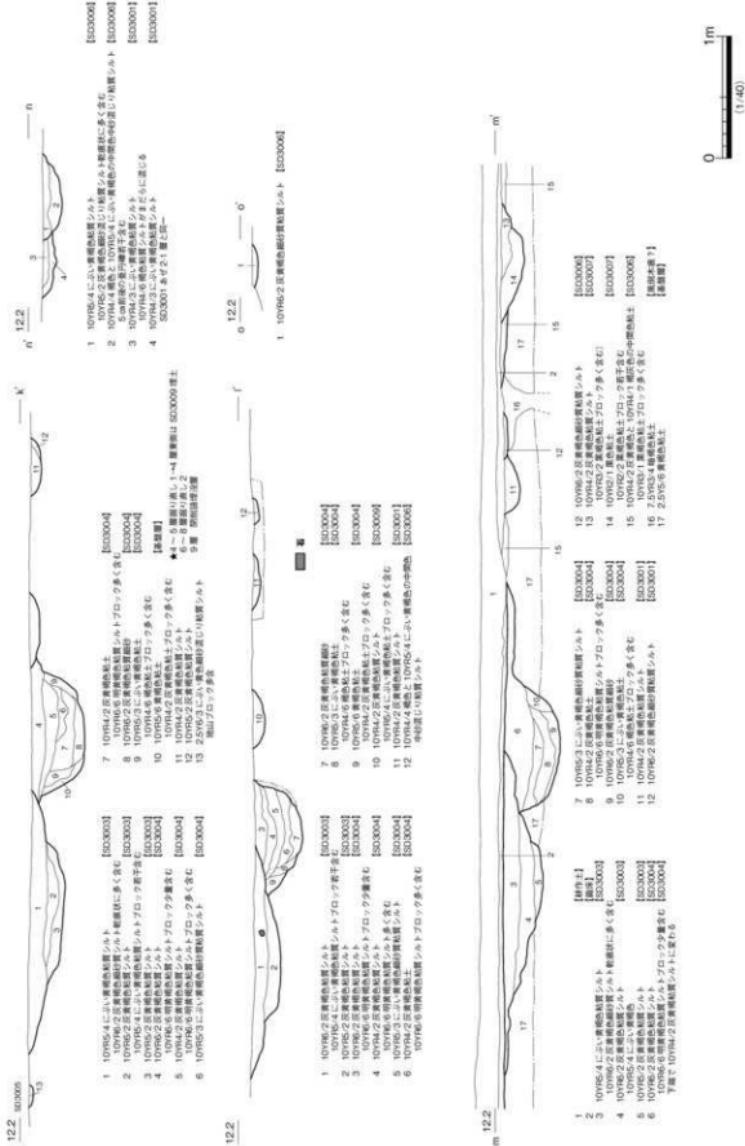
##### 溝

SD3001・3003・3004・3005・3006・3007・3009

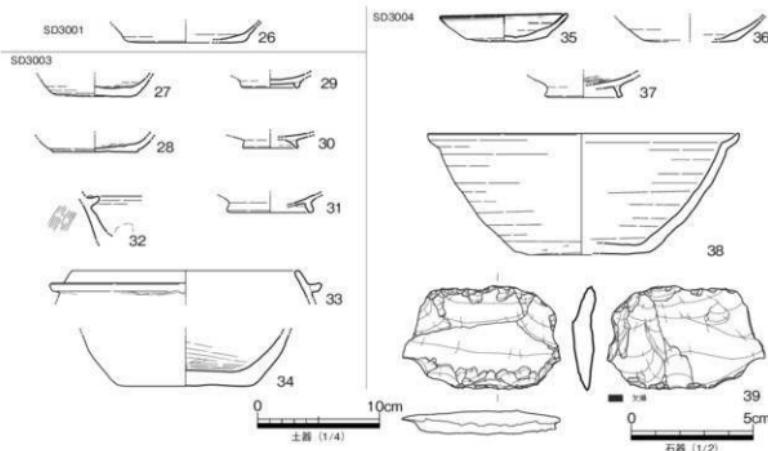
3区西端部近くを南北方向に流下する溝である。流下方向は周囲の条里地割の方向に合致する。溝の先後関係は、SD3004→SD3003、SD3004→SD3009、SD3001→SD3006、となっている。SD3009・3004・3003の西側一群のいずれかと、SD3001・3006の東側一群のいずれか、及びSD3005は併存していた可能性がある。

SD3001出土遺物 **26**は土師質土器杯である。小破片のため、底径は実測図よりも小さくなる可能性がある。

SD3003出土遺物 **27・28**は土師質土器杯である。十瓶山窯系須恵器椀 **29**の高台高さはかなり低い。椀A II -8型式（佐藤2000）と判断できる。**30**は土師質土器椀、**31**は内黒の黒色土器椀で、**29**に比べて高台の高さがある。**32・33**は土師質土器足釜、**34**は土師質土器甕である。**45**は写真のみを提示した。甕の把手のようにもみえるが、外面の仕上げがなされていない点、一部に黒斑が認められる点等から、土器焼成時に生じた可能性のある焼成土塊（乗松2020,pp.106-107）と考えられる。焼成土塊は本遺跡から数km西にある北野遺跡や、さぬき市の鴨部・川田遺跡で出土している。いずれも弥生時代前期後半



第23図 SD3001・SD3003～SD3007・SD3009断面図



第24図 SD3001 · SD3003 · SD3004 出土遺物実測図

の遺構に伴う。45も胎土は弥生時代前期の土器の胎土に近い。

SD3004出土遺物 35は土師質土器杯である。完形品の35は、やや厚手であるものの1d型式（東松2004）に該当する。36も体部の立ち上がりから同型式と考えられる。37は内黒の黒色土器碗、38は須恵器鉢である。サヌカイト製の39は、上端部または下端部を刃部とみてスクレイパーとした。風化は進んでいる。

時期 35からSD3004の埋没時期は14世紀後葉（IX期中段階、佐藤2016）と考えられる。32·33からSD3003の埋没も近い時期と判断される。小破片で断定するのは難しいが、26からSD3001も14世紀前葉前後の溝とみられる。SD3004に先行するSD3009は出土遺物からの時期を推測することができない。ただし、SD3003·3004出土遺物には12世紀前半（VII期古段階）あたりを示す30·31·37（28も近い時期だろう）が含まれているため、SD3009は12世紀前半までさかのばる可能性がある。

よってこれらのSD群の時期は、12世紀前半～14世紀後葉の幅でとらえておきたい。

#### 落ち込み状遺構

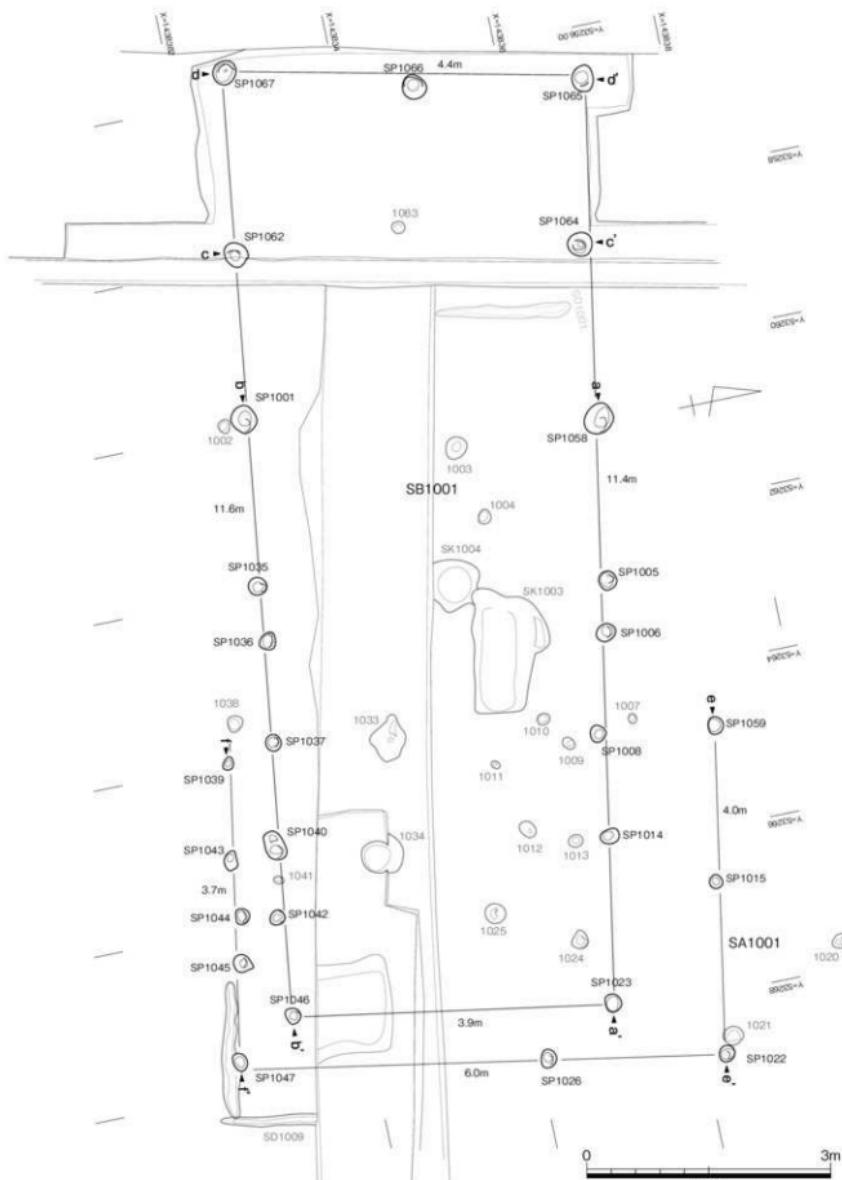
##### SX3001

3区で検出した平面形不定形の遺構で、西端部をSD3006に破壊される。遺物は出土していない。

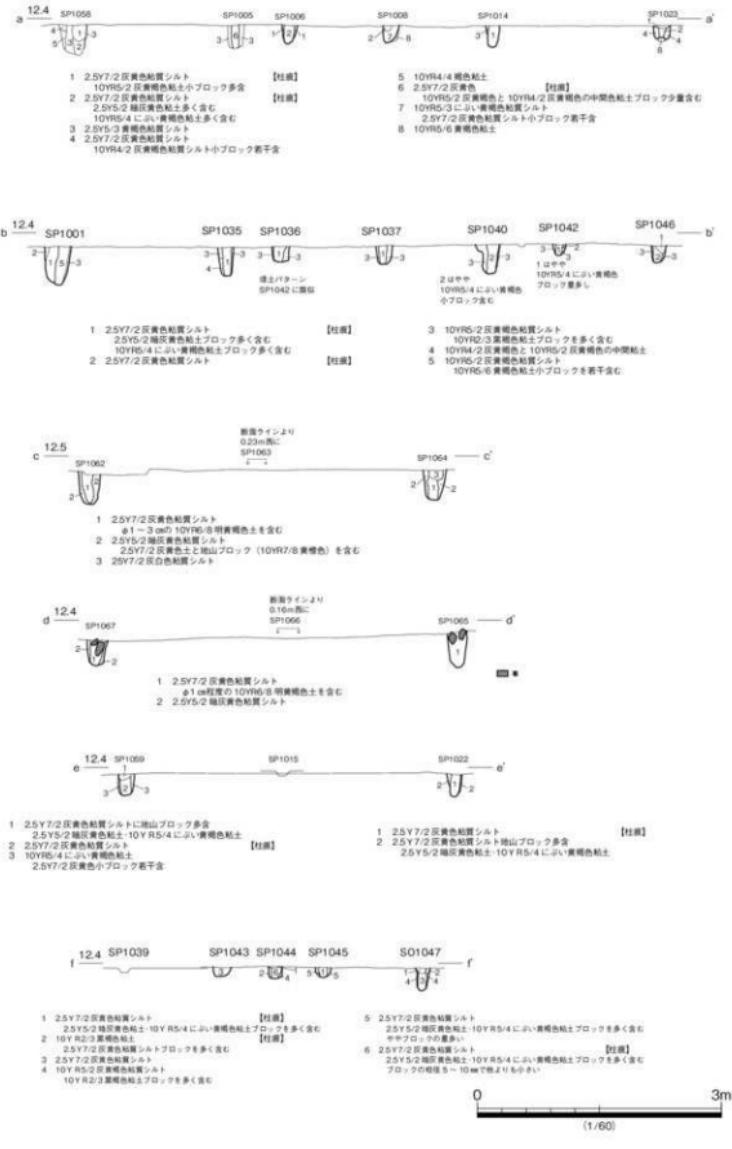
時期 埋土からSD3006等の溝群に近い12世紀前半～14世紀後葉としておく。

#### 第5節 近世以降の遺構と遺物

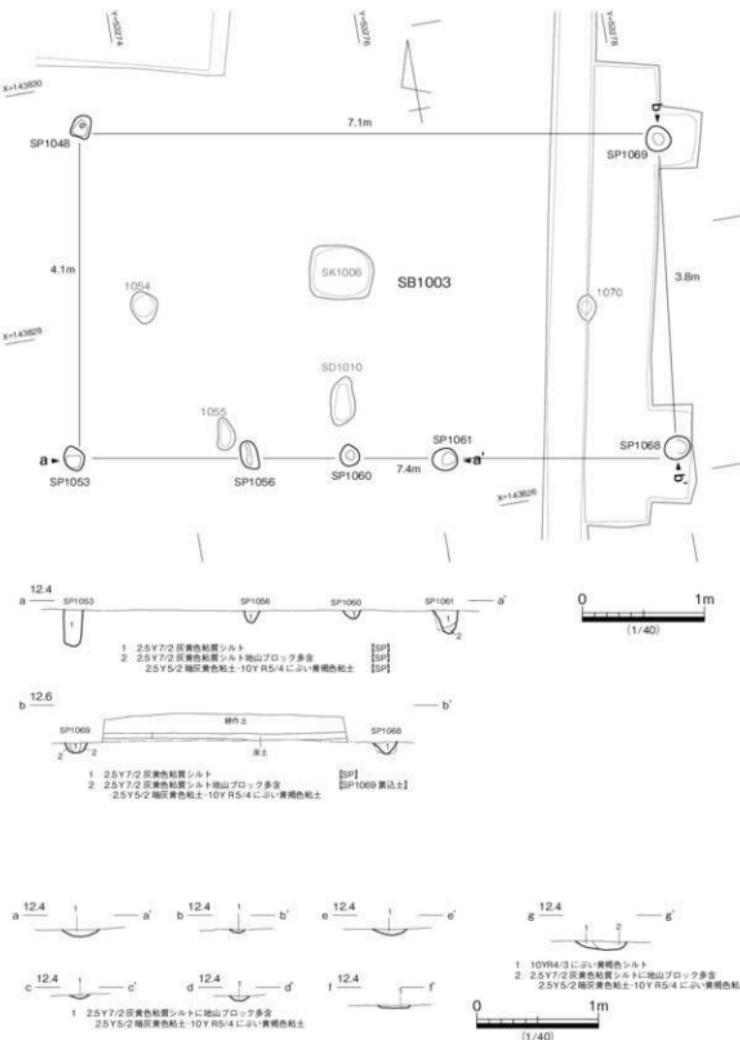
##### 掘立柱建物



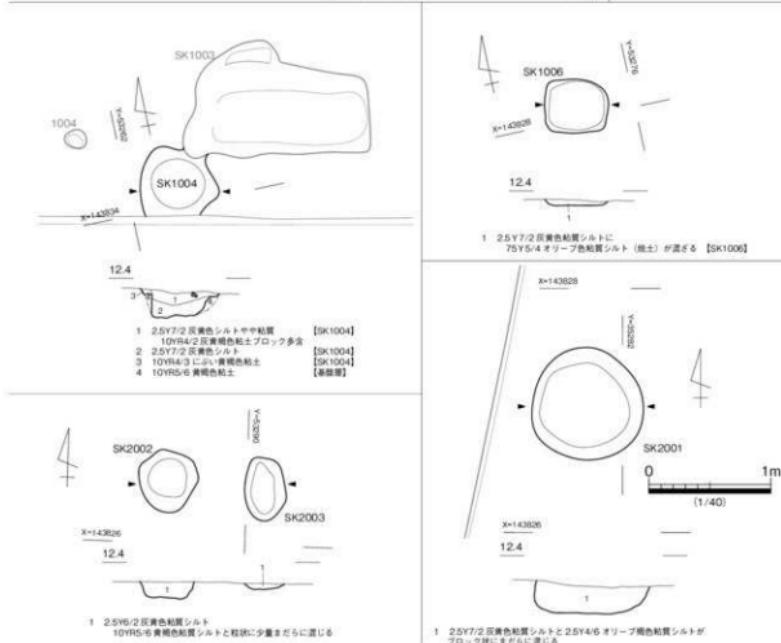
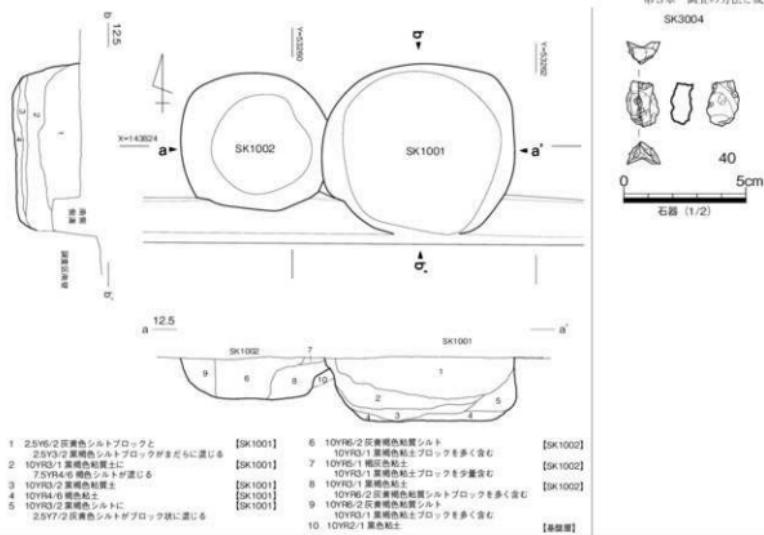
第25図 SB1001・SA1001 平面図



第26図 SB1001・SA1001断面図

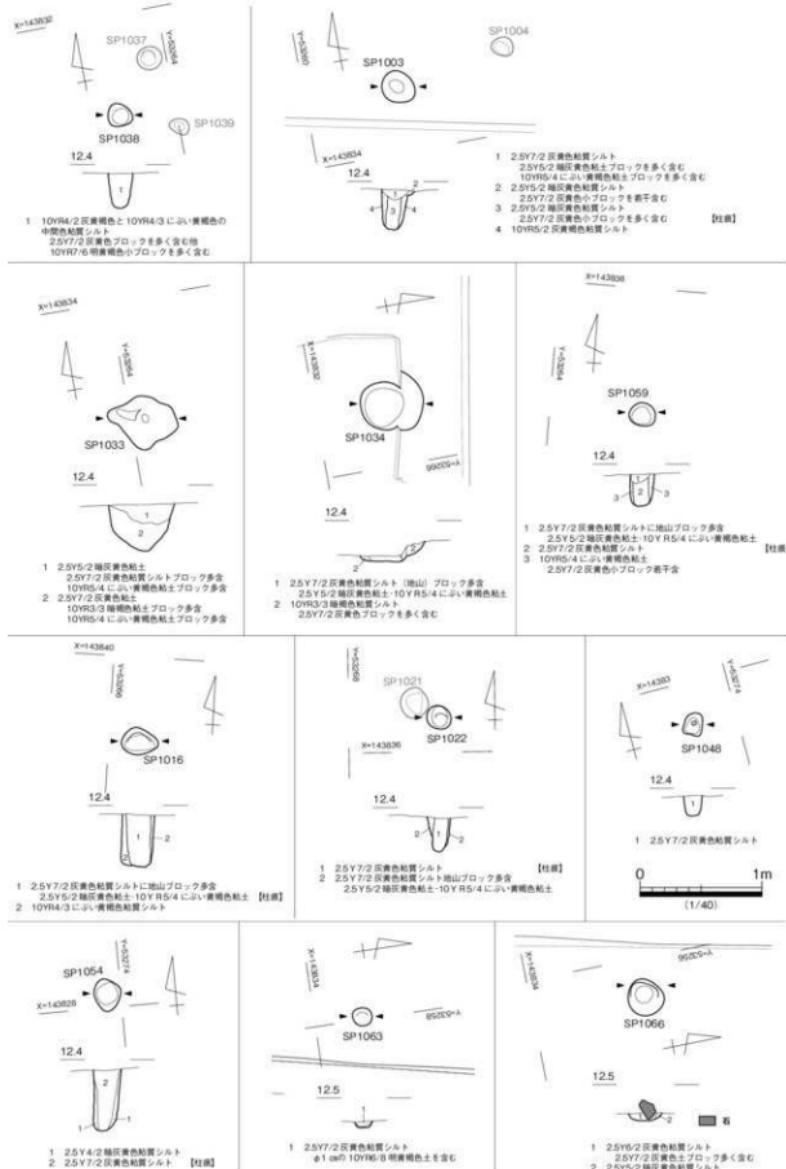


第27図 SB1003 平・断面図・SD1003・SD1004・SD1005・SD1007・SD1009 断面図



第28図 SK1001・SK1002・SK1004・SK1006・SK2001・SK2002・SK2003 平・断面図

SK3004 出土遺物実測図

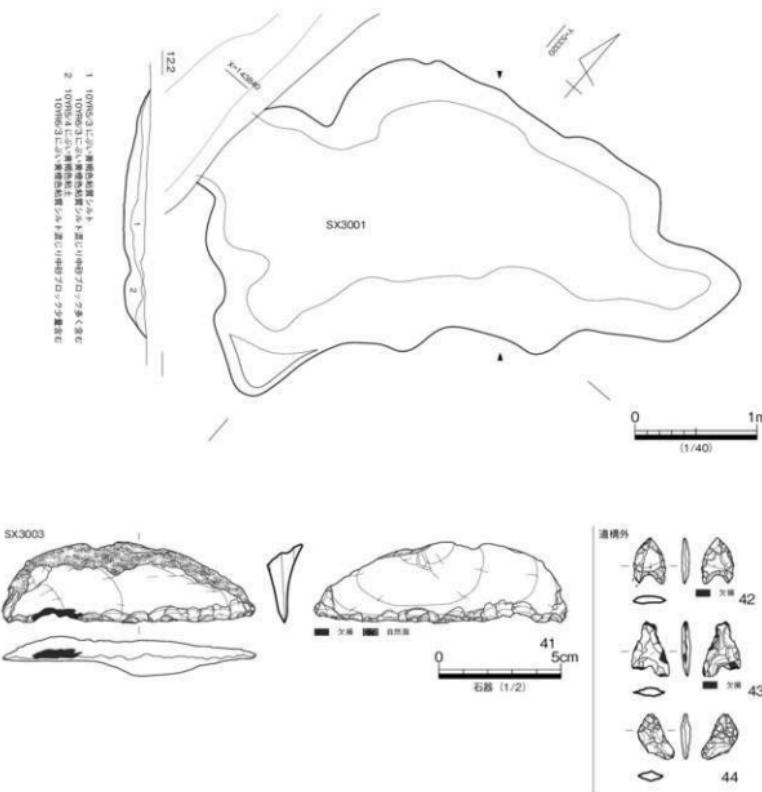


第29図 SP平・断面図

## SB1001、SA1001

1区西部で検出した、梁間（南北）4.4～6.0m、桁行（東西）11.4～11.6mの掘立柱建物である。SB1001の東端を「コ」状に開む柱列を、SB1001と併存する柵 SA1001とした。ただし、SA1001とした遺構についてはSB1001と重複する掘立柱建物の可能性も残る。主軸方向は周辺の条里地割の方向に合致する。いずれの柱穴も埋土は灰黄色系の粘土～粘質シルトが堆積している。遺物は出土していない。

時期 埋土から近世と考えられる。



第30図 SX3001 平・断面図・SX3003・遺構外出土遺物実測図

### SB1003

1区東部で検出した、梁間3.8～4.1m、桁行7.1～7.4mの掘立柱建物である。北辺及び東西辺は隅柱以外の柱穴を確認できなかったが、建物として復元した。主軸方向は周辺の条里地割の方向に合致する。柱穴の埋土は灰黄色粘質シルトである。遺物は出土していない。

時期 埋土から近世と考えられる。

### 溝

#### SD1003・1004・1005・1007・1009

いずれも1区で検出した溝で、主軸方向は周辺の条里地割の方向に合致する。SD1007・1009はSB1001の雨落ち溝だろう。

時期 いずれも埋土から近世とみられる。

### 土坑

#### SK1001・1002・1004・1006・2001・2002・2003・3004

1～3区で検出した土坑で、いずれも埋土は灰黄色系シルト～粘質シルトである。

SK3004出土遺物**40**は青緑チャート製火打石である。複数の棱線に使用痕が残る。

時期 埋土からいずれも近世と考えられる。なお、香川県内における大田井産チャート製火打石は18世紀以降に流通範囲を拡大させる（蔵本2019）。この点を重視すれば、SK3004は18世紀以降とみることも可能である。

## 第6節 その他の遺物

**41**は3区のSX3003から出土したサスカイト製スクレイパーである。上端部に残る自然面を打面とし、下端部には刃部調整が施される。**42～44**は遺構に伴わないサスカイト製石鎌である。

### 参考文献

- 藏本晋司 2019「香川県周辺地域における火花式発火法の導入と展開」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 上林遺跡』香川県教育委員会ほか, pp.174-197  
佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における土器編年」財团法人香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会ほか, pp.405-468  
佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業(I) 9世紀後葉～11世紀前葉の供給器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』, pp.41-72  
乗松真也 2004「14～15世紀の土師質土器杯編年」財团法人香川県埋蔵文化財調査センター編『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか, pp.303-308  
乗松真也 2020「自然科学分析の目的と概要」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 北野遺跡・糠野西遺跡』香川県埋蔵文化財センター, pp.106-108  
森下英治 1998「龍川五条道路出土前期弥生土器の編年」財团法人香川県埋蔵文化財調査センター編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊 龍川五条道路II 鮫野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか, pp.284-325

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 六条下所遺跡の花粉分析

森 将志 (バレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

六条下所遺跡で検出された弥生時代前期の流路周辺の古植生を検討するために、花粉分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われている（第4章第2節参照）。

#### 2. 試料と方法

分析試料は、SR1001 流路 A と SD1013 から採取された計 2 点である（第3表）。時期はいずれも弥生時代前期とされている。また、写真1に採取された堆積物試料の断面画像を示す。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料 No.	遺構	層位	時期	岩質
KRG-G0017	SR1001 流路 A	第 16 団 27 層	弥生時代前期	10YR2/2 黒褐色粘土 一部下位に 10YR3/2 黑褐色細砂
KRG-G0034	SD1013	第 17 团 11 層		10YR2/2 黑褐色粘土 10YR3/4 暗褐色細砂を多量に含む

第3表 分析試料一覧



写真1 分析試料の断面画像

試料（湿重量約 3～4g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え、1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを

滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC.2979～2986）を作製し、写真を写真2に載せた。

### 3. 結果

今回の分析試料に含まれる花粉化石は、保存状態が良好ではなかった。そうしたなかで、2試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉15、草本花粉7、形態分類のシダ植物胞子2の、総計24である。これらの花粉・シダ植物胞子の一覧を第4表に、花粉分布図を第31図に示した。花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基準とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

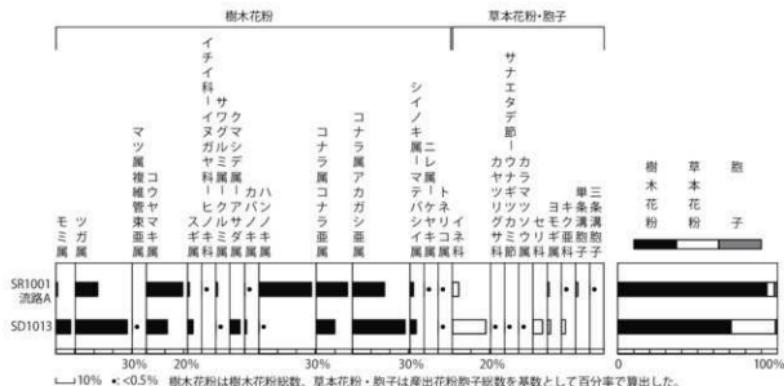
2試料では、ツガ属やコウヤマキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属等の樹木花粉産出が目立つ。一方、SR1001流路Aではハンノキ属の産出が目立つが、SD1013ではハンノキ属の産出が稀であるという相違点もある。

学名	和名	SR1001 流路 A	SD1003
樹木			
<i>Abies</i>	モミ属	2	16
<i>Tsuga</i>	ツガ属	25	56
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複種東亜属	-	1
<i>Schizopitys</i>	コウヤマキ属	41	23
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	2	6
Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae	イチイ科 - イスマガヤ科 - ヒノキ科	1	-
<i>Prunus</i> - <i>Juglans</i>	サクランボ属 - クルミ属	2	1
<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	クワシデ属 - アサガ属	-	11
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	2
<i>Aleurites</i>	ハンノキ属	59	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	35	20
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	36	57
<i>Castanopsis</i> - <i>Pasania</i>	シノキ属 - マテバシイ属	4	7
<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	ニレ属 - ケヤキ属	1	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1	1
草本			
Gramineae	イネ科	8	51
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echinocaulon</i>	サナエタデ節 - ナガツカミ節	-	1
<i>Thlaspiatum</i>	カブソウ属	-	1
Araliaceae	セリ科	-	15
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	2	5
Tubuliflorae	キク科	1	6
シダ植物			
monolete type spore	單溝溝胞子	3	-
trilete type spore	三条溝胞子	1	-
Arboreal pollen	樹木花粉	210	202
Nonarboreal pollen	草本花粉	11	80
Spores	シダ植物胞子	4	-
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	225	282
Unknown pollen	不明花粉	-	3

第4表 産出花粉胞子一覧表

### 4. 考察

今回の分析試料に含まれる花粉化石は保存状態が良好ではなかった。大型植物遺体の残存状況も悪く、



第31図 六条下所遺跡における花粉分布図

植物化石の保存状態をふまえると、SR1001 流路 A や SD1013 の分析層準は、湿潤な環境ではなかった可能性がある。試料断面観察では、未分解の植物遺体片が含まれず、腐植を多く含む。植物化石の保存状態をふまえると、この腐植は、流路周辺の好気的な環境下で形成された表土からの再堆積に由来する可能性がある。

このように花粉の分解・消失等で本来の花粉組成が歪められている可能性があるものの、2試料ともに十分な量の花粉化石が得られたため、得られた花粉化石群集から古植生を検討した。

照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属は、2試料に共通して産出が目立ち、同じく照葉樹林要素のシイノキ属・マテバシイ属も伴っている。遺跡周辺の氾濫原を含む丘陵地や台地等には、アカガシ亜属を主体とし、シイノキ属・マテバシイ属を伴う照葉樹林が分布していた可能性がある。2試料では、その他にもモミ属やツガ属、コウヤマキ属といった中間温帶林を構成する分類群や、コナラ属コナラ亜属の産出も目立つため、遺跡周辺の丘陵地や台地等にはモミ属やツガ属、コウヤマキ属等の針葉樹やコナラ属コナラ亜属といった落葉広葉樹からなる森林植生も広がっていたと思われる。

一方で、ハンノキ属はSR1001流路AとSD1013で産出率が著しく異なる。ハンノキ属は河畔林要素として知られており、ハンノキ属の産出率の相違は、SR1001流路A周辺とSD1013周辺に成立した古植生の相違を反映している可能性がある。なお、草本花粉を見ると、ハンノキ属が多く産するSR1001流路Aでは産出割合が低く、ハンノキ属の産出が稀なSD1013では産出割合が高い。ハンノキ属の河畔林が発達するSR1001流路A周辺では草本類の分布がまばらで、ハンノキ属の河畔林が疎らなSD1013周辺では、イネ科やセリ科、ヨモギ属、キクア科等の草本類が分布を広げていた可能性がある。

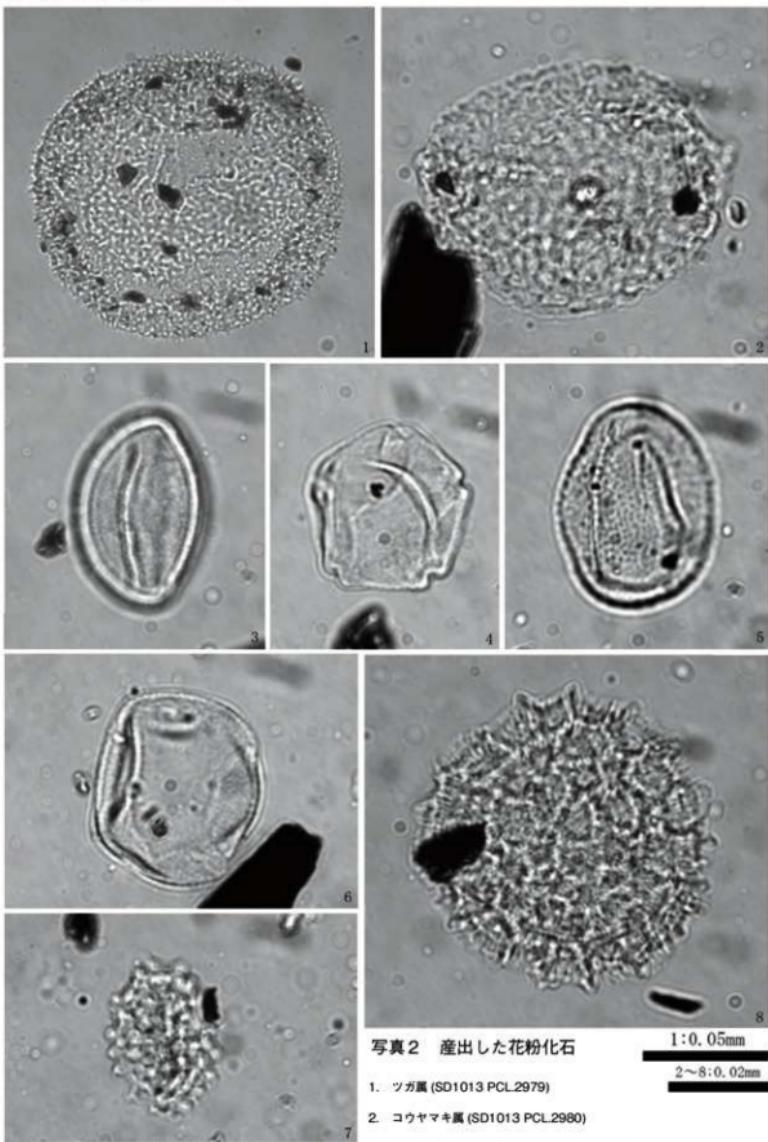


写真2 産出した花粉化石

1:0.05mm

2~8:0.02mm

4. ハンキ属 (SR1001 流路 A PCL.2982)  
6. イネ科 (SD1013 PCL.2984)  
8. サナエダテ節 - ウナギツカミ節 (SD1013 PCL.2986)

1. ツガ属 (SD1013 PCL.2979)  
2. コウヤマキ属 (SD1013 PCL.2980)  
3. コナラ属アカガシ亜属 (SD1013 PCL.2981)  
5. トネリコ属 (SR1001 流路 A PCL.2983)  
7. キク亜属 (SD1013 PCL.2985)

## 第2節 六条下所遺跡から出土した大型植物遺体

バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

六条下所遺跡の弥生時代前期の流路埋土から得られた種実の同定結果を報告し、当時の利用植物について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析も行われている（第4章第1節参照）。

### 2. 試料と方法

試料は、弥生時代前期のSR1001流路Aの27層と、SD1013の11層から採取された土壌の2試料で、香川県埋蔵文化財センターにより採取された。

堆積物試料の水洗は、パレオ・ラボで行った。試料700ccについて最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出、同定、計数は、肉眼及び実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数が困難な分類群は、記号（+）で示した。試料は、香川県埋蔵文化財センターに保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、検出された大型植物遺体はイネ穂殻のみであった。大型植物遺体以外には不明の昆蟲遺体も得られたが、同定の対象外とした（第5表）。

以下に、得られた大型植物遺体について遺構別に記載する。

SR1001流路A：イネ穂殻破片3点が得られた。

SD1013：同定可能な種実は得られなかった。

次に、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名については、米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG IIIリストの順とした。

#### (1) イネ *Oryza sativa L.* 穂殻 イネ科

黄褐色で、縦方向に明瞭な稜線があり、基部は残っていない。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。最大の破片で残存長4.5mm、残存幅1.2mm。

注記番号	KRG-G0017	KRG-G0034
区	1区	1区
遺構	SR1001 流路 A	SD1013
層位	27層	11層
時期	弥生時代前期	
分類群	水洗量(cc)	
イネ	穂殻	(3)
不明	昆蟲遺体	(+)
		種実なし

+1.9  
括弧内は破片数

第5表 大型植物遺体

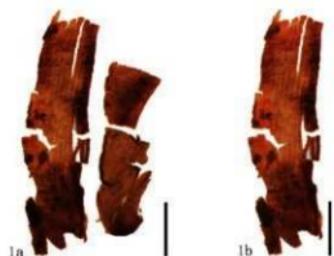


写真3 六条下所遺跡から出土した大型植物遺体

1. イネ穂殻 (SR1001 流路 A. 26層)

#### 4. 考察

六条下所遺跡の弥生時代前期の遺構から出土した大型植物遺体を同定した結果、非常にわずかな量の種実が得られた。

SR1001 流路 A からは水田作物のイネ糊殻が得られたが、その由来は現状で特定できない。SD1013 には同定可能な植物遺体が残存しておらず、植物遺体が堆積していたとしても、分解、消失したと考えられる。大型植物遺体は好気的な環境下では化石として残りにくい。SD1013 の 11 層は、堆積中あるいは堆積後に乾燥した環境に晒される等、生の大型植物遺体が残存しにくい堆積環境であったと推定される。

#### 引用文献

米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名－学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

### 第3節 六条下所遺跡のテフラ分析

藤根 久・鈴木正章（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

遺構検出面の基盤層の堆積年代を明らかにする目的で、下層確認トレンチで採取された堆積層の8点について、鉱物組成と火山ガラスの形態分類及び火山ガラスの屈折率測定を行った。

#### 2. 試料と方法

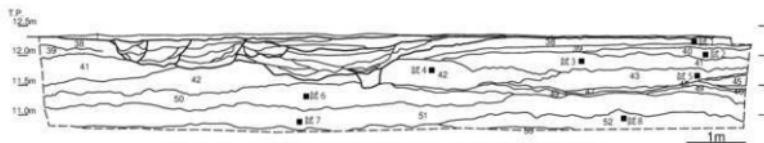
分析試料は、SR1001 下層確認トレンチから採取された8点である（第6表）（第16図参照）。第32・33図に、採取された分析試料の断面斜面、採取位置を示した断面図、柱状図を示す。

分析No.	注記番号	採取位置	層位	特徴
1	KRG-G0039	下層確認トレンチ	1層	10YR6/4 に赤い黄褐色粘土
2	KRG-G0040		3層	5Y6/4オリーブ黄色粘土
3	KRG-G0041		4層	25Y8/6 黄色粘土混じり繊維～中砂 小粒の Mn 含む
4	KRG-G0042		5層	10YR7/8 黄褐色粘土 繊維混じる
5	KRG-G0043		6層	10YR6/8 明黄褐色粘土混じり繊維～中砂 Fe の雲状斑紋
6	KRG-G0044		12層	75Y7/2灰白色粘土 繊維混じる
7	KRG-G0045		13層	5Y5/3灰オリーブ色繊維 シルト多く混じる Fe の雲状斑紋
8	KRG-G0046		14層	5Y4/1灰褐色繊維 粘土多く混じる

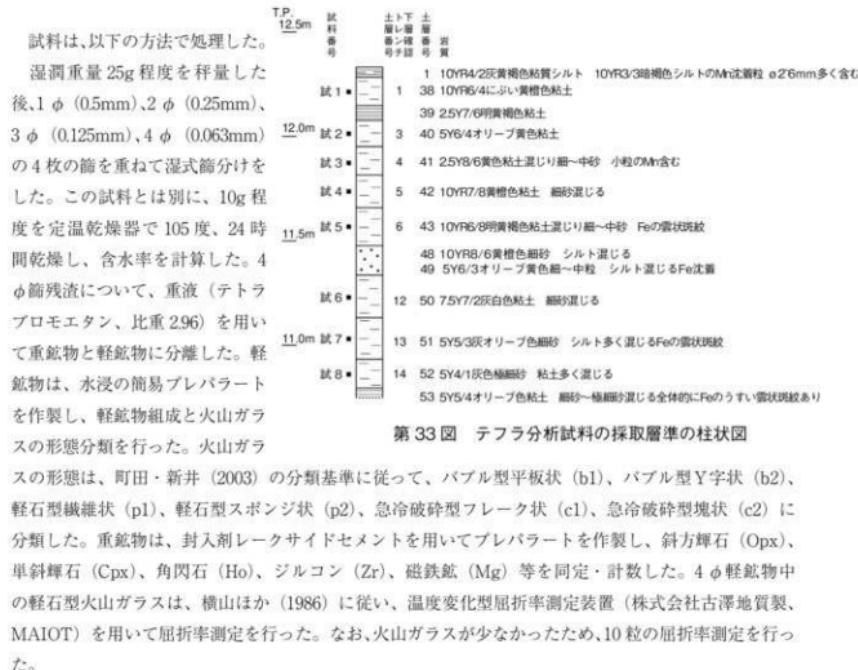
第6表 テフラ分析試料の詳細



写真4 火山灰分析試料の断面写真



第32図 下層確認トレンチのテフラ分析試料の採取位置



### 3. 結果

以下に、鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率測定の結果について述べる。

分析試料は、いずれもシルト～粘土からなる。含水率は、7.03～18.60% であった。籠分けした結果、 $4\phi$  篩残渣が最も多い。 $4\phi$  以上の含砂率は、14.19～52.70% であり、分析 No.5 (6 層) が最も高く、分析 No.6 (12 層) が最も低い。 $4\phi$  粒子の重液分離では、いずれの試料も軽鉱物の割合が非常に高い(第7表)。

軽鉱物では、複合した鉱物からなる不明粒子 (Opq) が多く、石英 (Qu) や長石 (Pl) が検出された。火山ガラスは、全体的に少なく、分析 No.1 や分析 No.2 あるいは分析 No.4 において主にバブル型ガラス (b1, b2) が検出された(第8表、第34図)。これら火山ガラスには、淡褐色からなるガラスも含

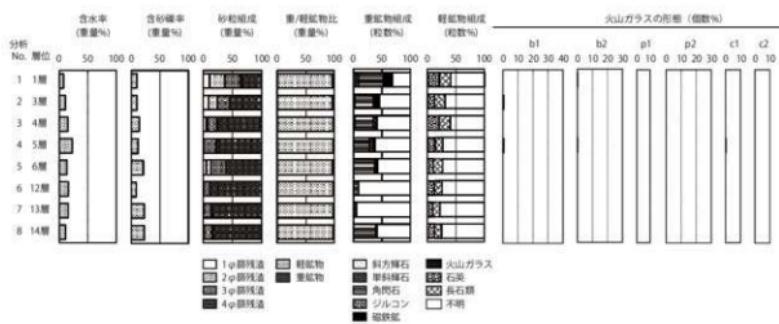
分析No.	処理湿潤重量(g)	処理乾燥重量(g)	含水率(%)	砂粒分の粒度組成(重量g)				4φ以上含有率(%)	軽・重鉱物組成(重量g)	
				1φ	2φ	3φ	4φ			
1	14.51	13.49	7.03	0.28	0.67	0.72	0.94	19.35	0.34	0.01
2	13.41	12.11	9.69	0.22	0.39	0.53	1.37	20.73	0.29	0.01
3	16.00	13.90	13.13	0.19	0.09	0.62	2.74	26.19	0.41	0.01
4	15.54	12.65	18.60	0.00	0.05	0.90	3.25	33.20	0.47	0.01
5	14.32	12.60	12.01	0.35	0.56	1.69	4.04	52.70	0.34	0.01
6	18.14	15.65	13.73	0.00	0.01	0.23	1.96	14.19	0.40	0.01
7	23.38	20.19	13.64	0.01	0.01	0.73	4.91	28.03	0.51	0.01
8	20.91	18.82	10.00	0.00	0.01	0.91	4.93	31.08	0.45	0.01

第7表 テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

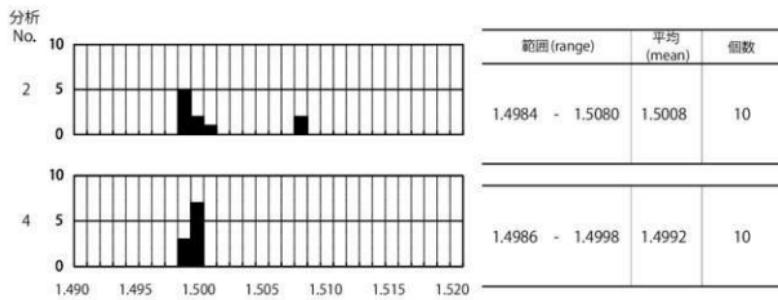
分析 No.	石英 (Qu)	長石 (Pb)	不明 (Opq)	火山ガラス						ガラス 合計	偏光 合計	重鉱物						重鉱物 の合計
				バブル (泡)型	平板状 (b1)	Y字状 (b2)	鐵錐状 (p1)	スボン ジ状 (p2)	フレー ク状 (c1)			斜方 輝石 (Opx)	單斜 輝石 (Cpx)	角閃 石 (Ht)	ジル コン (Zr)	磁鐵 鉱 (Mg)	不明 (Opq)	
1	52	49	148		1					1	250	10	14	108	4	35	79	250
2	31	46	171	2						2	250	5	3	80	2	24	136	250
3	52	49	149							0	250		7	82	9	7	145	250
4	30	33	183	2	1				1	4	250		3	71	12	11	154	250
5	27	39	184							0	250		1	94	5	7	143	250
6	32	32	186							0	250		1	21	1		227	250
7	24	31	195							0	250			14	1		235	250
8	32	31	187							0	250			97	3	4	146	250

備考は、計数以外の火山ガラスの特徴を示す。

第8表 藤残渣中の鉱物組成



第34図 テフラ試料の含水率・含砂率・鉱物組成の分布図



第35図 火山ガラスの屈折率測定結果

まれていた。重鉱物は、全体的に角閃石が多く含まれ、ジルコンも含まれていた（第8表、第34図）。

分析No.2の火山ガラスの屈折率測定では、範囲 1.4984-1.5080（平均 1.5008）であった。また、分析No.4の火山ガラスの屈折率測定では、範囲 1.4986-1.4998（平均 1.4992）であった（第35図）。

#### 4. 考察

下層確認トレーナーの1層、3層、4層、5層、6層、12層、13層、14層の8試料について、テフラ分析を行つ

た。その結果、全体的に火山ガラスは少なく、特定のテフラ層は検出されなかった。なお、分析 No.2 及び分析 No.4 の試料中の火山ガラスの屈折率測定では、主に低い屈折率を示す火山ガラス（1.499-1.500）が検出された。これら火山ガラスは、主にバブル型火山ガラスであることから、以下に示す始良 Tn テフラ（AT）起源の火山ガラスと考えられる。

始良 Tn テフラ（AT）は、南九州始良カルデラを噴出源として噴出した降下軽石（pfa）、巨大火砕流堆積物（pfb）とその降下火山灰（afa）からなる。このテフラは、日本列島をすっぽりおおい、日本海全域、朝鮮半島、東シナ海、太平洋四国海盆を広くおおっている。分布は 1,200km 以上に及ぶ。主な鉱物は、斜方輝石（Opx）と単斜輝石（Cpx）、少量の石英（Qt）からなる。火山ガラスの屈折率が 1.498-1.501、斜方輝石（opx）の屈折率が 1.728-1.734 である（町田・新井、2003）。

なお、水月湖クロノロジーに基づいた年代は、 $30,009 \pm 189(2\sigma)$  yr BP である（Smith et al. 2013）。

以上、今回の分析では、特定のテフラ層が検出されず、遺構検出面の基盤層の堆積年代に関しての詳細な情報が得られなかった。ただし、AT が混在する結果から、今回の分析層準については、約 3.0 万年以降に堆積したと推定される。

#### 引用文献

- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。336p. 東京大学出版会。  
Smith V.C., Staff R.A., Blockley S.P.E., Bronk Ramsey C., Nakagawa T., Mark D.F., Takemura K., Danhara T., Suigetsu 2006  
Project Members (2013) Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews, 67, 121-137.  
横山卓雄・檀原 健・山下 遼（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究, 25, 21-30.

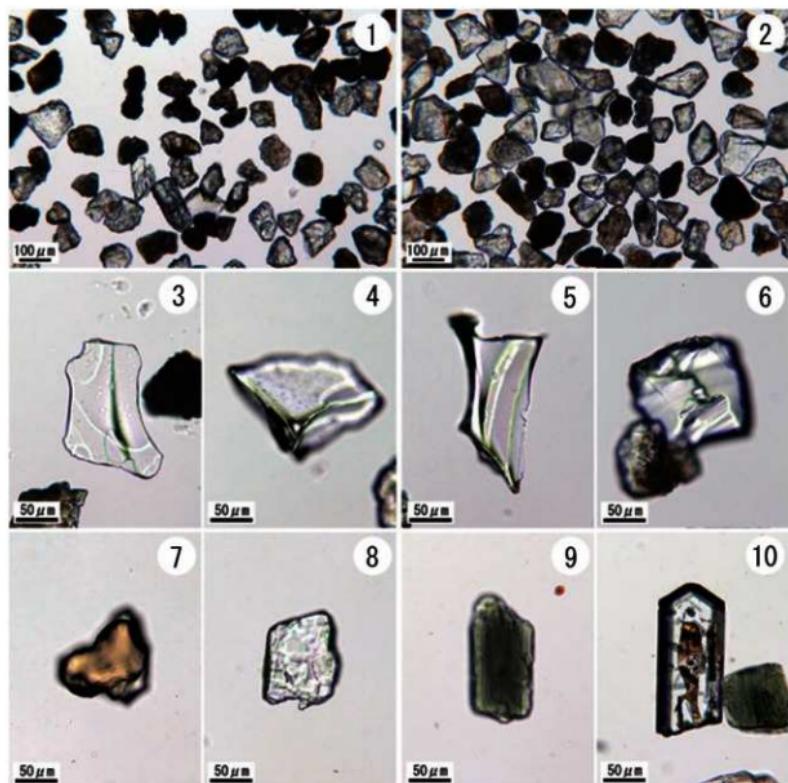


写真5 テフラ試料中の粒子の顕微鏡写真

1. 4φ 篩残渣中の軽鉱物（分析 No. 2） 2. 4φ 篩残渣中の軽鉱物（分析 No. 4）
3. バブル型平板状ガラス（分析 No. 1） 4. バブル型Y字状ガラス（分析 No. 4）
5. バブル型Y字状ガラス（分析 No. 1） 6. 急冷破砕型フレーク状ガラス（分析 No. 4）
7. 斜方輝石（分析 No. 1） 8. 単斜輝石（分析 No. 2）
9. 角閃石（分析 No. 1） 10. ジルコン（分析 No. 1）

## 第5章 総括

六条下所遺跡の発掘調査では、弥生時代前期以前から近世にかけての遺構を確認した。以下、時期ごとに遺構の変遷を述べる。

### 弥生時代前期以前

溝SR1001 流路 A～D の埋没時期は弥生時代前期後半と考えているが、縄文時代晚期にも機能していた可能性もある。また、SR1001 流路 A～D の下面で地割れ痕が検出された。

### 弥生時代前期後半

SR1001 流路 A～D、SR1001、SD1013・1015 の流路は近い位置にあり、SD1013・1015 の出土遺物から、最終埋没は弥生時代前期後半とみられる。今回の調査地の北に隣接する高松市教育委員会調査地の SR01、西に近接する空港跡地遺跡 I 地区の SRi02 でも弥生時代前期後半の遺物が出土しており、位置や流下方向も考慮していずれも SR1001 等と同一の溝と考えられる（第37図、註1）。また、空港跡地遺跡（上青木地区）の NR01 についても、遺物は出土していないが連続する溝と推測される。これらの溝群の総延長 300m 以上となる。SR1001 等は水田への導水路と考えられるが、両岸に近接する水田は未確認で、周辺が高燥していた可能性であった土地環境（第4章）を考慮すれば、導水の目的地は下流の沖積平野とみられる。さらに、取水先はより上流の流路や谷に求められ、導水路の敷設距離はかなり長くなる。

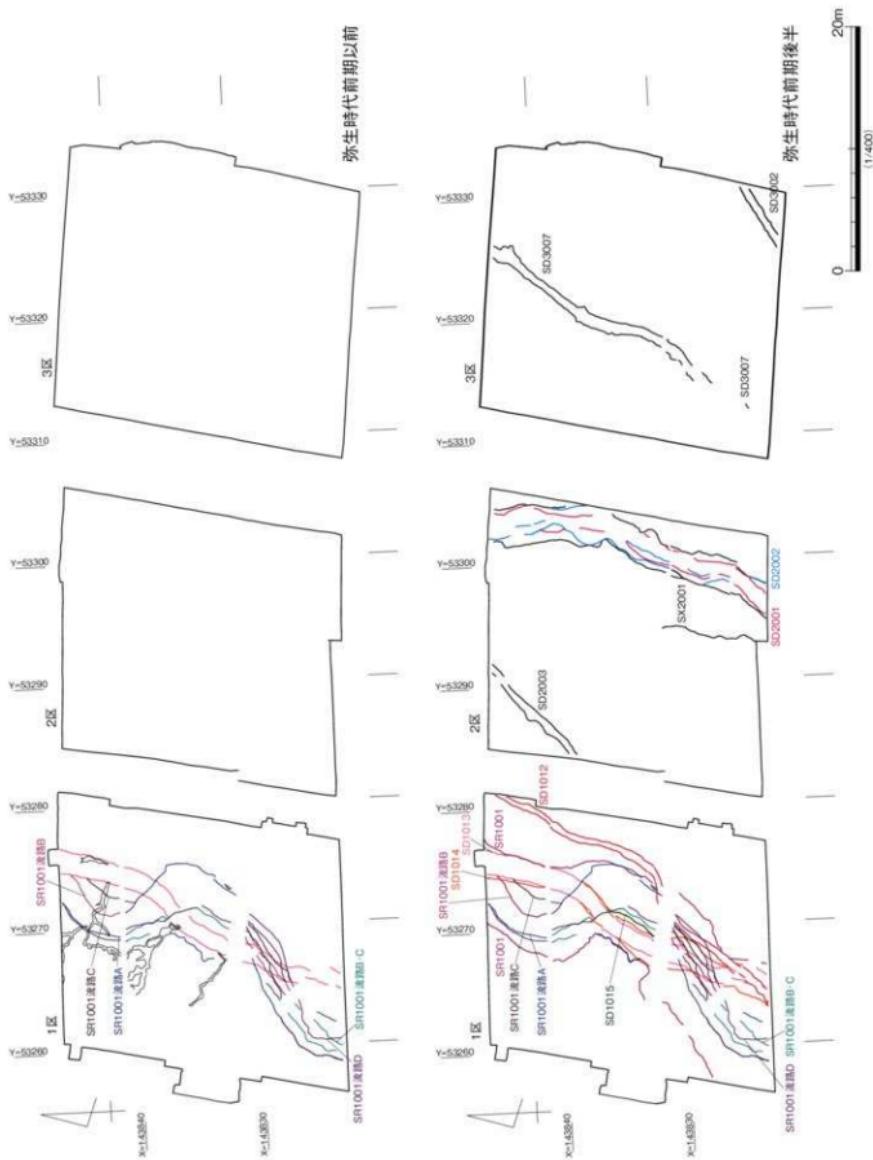
SR1001 等が埋没した後に形成される SD1012 も、埋土が SR1001 等に似るため、弥生時代前期後半に位置付けられる。高松市教育委員会調査地でも幅が広い溝の埋没後に掘削される溝があり、空港跡地遺跡にも SR1001 等と近い時期と考えられている SDi19 が確認されている。これらの溝は SD1012 と連続すると考えられる。

同じく南西 - 北東方向の溝 SD2003 も遺物は出土していないが、SR1001 等、または SD1012 から分岐する溝と考えて同時期とした。

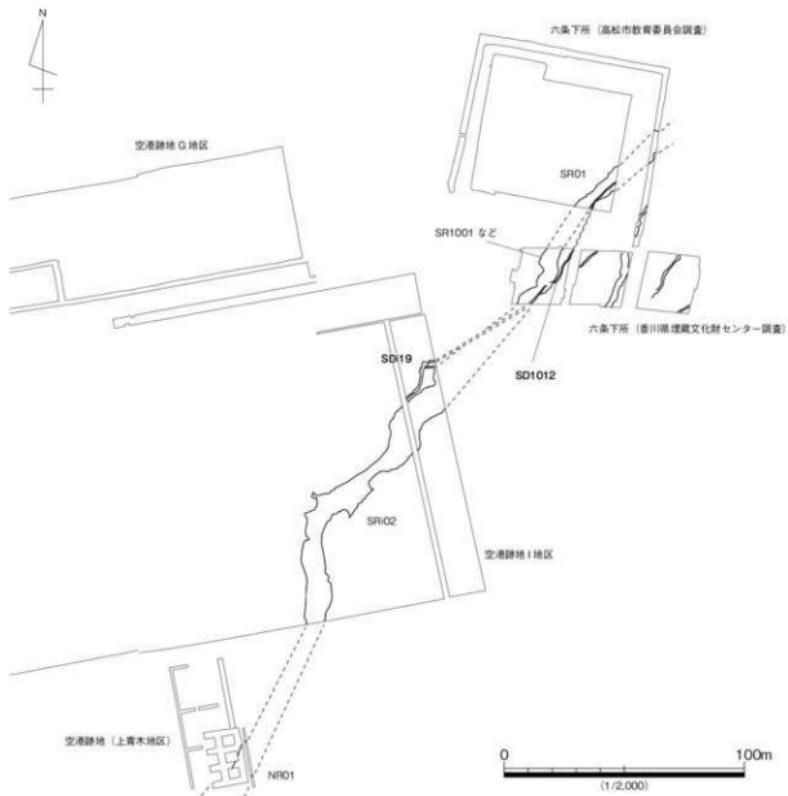
SD2001・2002 は条里方向に合致しないため、7世紀以前の溝であることはほぼ確実である。今回の調査地では弥生時代中期～7世紀の遺物が出土していないため、SD2001・2002 も弥生時代前期後半の溝と考えた。ここから派生する可能性のある SD3002・3007 も同時期とみたい。ただし、空港跡地遺跡 I 地区では SRi02 埋没後に弥生時代後期後半の溝 SRi01 が掘削され、空港跡地遺跡（上青木地区）でも NR01 埋没後に古墳時代前期の溝 SD01・03 が設けられる。このため、六条下所遺跡 SD2001・2002・3002・3007 は、空港跡地遺跡の弥生時代後期後半から古墳時代前期の溝に連続する可能性も否定はできない。

### 古代末～中世

3区西端部の溝 SD3001・3003・3004・3005・3006・3009 の時期は、出土遺物から 12世紀前葉～14後葉とみられる。周辺の条里地割から条里を復元すると、これらの溝群は坪界に合致する。掘削が何度も行われているのは、坪界を示す溝であったことも想定される。



第36図 時期別遺構配置図（弥生時代前期以前～弥生時代前期後半）



第37図 弥生時代前期の自然流路と溝

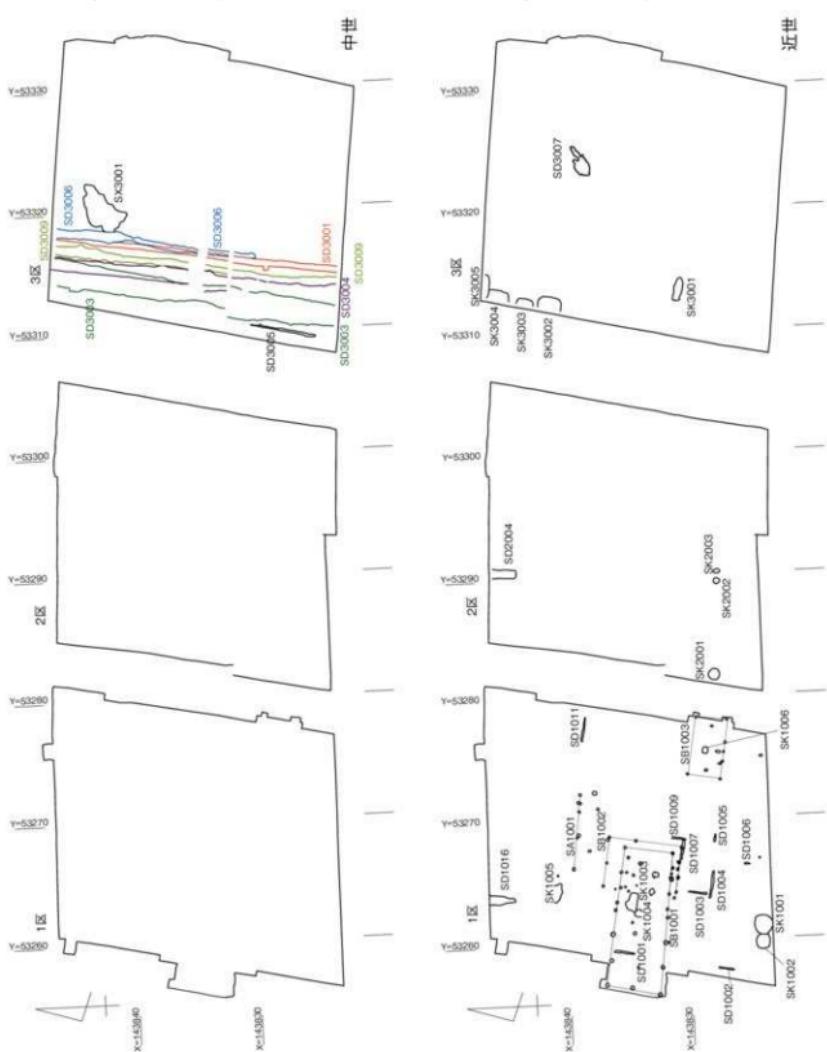
### 近世

埋土から近世と判断した遺構は1区に集中する。掘立柱建物 SB1001 は、一部に区画 SA1001 を伴う。西に近接する空港跡地遺跡 I 地区では、17世紀以降の掘立柱建物が緩くまとまるように検出されている。空港跡地遺跡の建物群が同時期にどれだけ併存していたかは不明だが、複数の建物が緩くまとまりながら点在していたとみられる。六条下所遺跡の建物群も空港跡地遺跡 I 地区の状況と類似する。

### 註

1 高松市教育委員会調査地の状況については、香川将慶氏の教示を得た。

20m  
0 [1:400]



第38図 時期別遺構配置図（中世～近世）

発掘調査報告書

太田原高州遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2014「県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 太田原高州遺跡 1」  
香川県教育委員会

上西原遺跡：高松市教育委員会編 2000「上西原遺跡・附汲仏遺跡・太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊」  
鴨部・川田遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1997「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 鴨部・  
川田遺跡Ⅰ」香川県教育委員会はか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2000「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調  
査報告第9冊 鴨部・川田遺跡Ⅱ」香川県教育委員会はか

北口遺跡：高松市教育委員会編 2017「大野地区統合保育所用地理蔵文化財発掘調査報告書 北口遺跡」高松市教育委員会

北野遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2020「県道中德三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 北野遺跡・兼  
野西遺跡」香川県教育委員会はか

鬼無藤井遺跡：高松市教育委員会編 2001「鬼無藤井遺跡・高松港頭地区再開発開削事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」高松市  
教育委員会

空港跡地遺跡：空港跡地遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財センター編 1998「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3  
冊 空港跡地遺跡Ⅲ」香川県教育委員会はか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2002「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文  
化財発掘調査報告第5冊 空港跡地遺跡Ⅴ」香川県教育委員会はか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2004「空港跡地  
整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 空港跡地遺跡Ⅷ」香川県教育委員会はか／香川県埋蔵文化財センター編 2007「空  
港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊 空港跡地遺跡Ⅸ」香川県教育委員会はか／高松市教育委員会編 2013 四国  
細胞病理センター新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 空港跡地遺跡（上青木地区）」高松市教育委員会

高野丸古墳：香川考古学研究会編 1994「香川考古」3、香川考古刊行会

汲仏遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2018「香川県警察本部機動隊舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 汲仏遺跡」香川  
県教育委員会

さご・長池遺跡：高松市教育委員会編 1993「一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 さご・長池遺跡」  
高松市教育委員会

さご・長池Ⅱ遺跡：高松市教育委員会編 1994「一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 さご・長池  
Ⅱ遺跡」高松市教育委員会

多肥北原遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2012「県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原遺跡」香川  
県教育委員会

多肥北原西遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2015「県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原西遺跡」  
香川県教育委員会

多肥塙寺：多肥塙土史編集委員会編 1981「多肥塙土史」／丹羽祐一、藤井雄三 1988「高松の古代文化」高松市図書館

多肥松林遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1999「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 多肥松林遺  
跡」香川県教育委員会はか

多肥宮尻遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2018「県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥宮尻遺跡」香川  
県教育委員会

天満・宮西遺跡：高松市教育委員会編 2002「天満・宮西遺跡～集落、水田編～ 太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘  
調査報告第6冊」高松市教育委員会

林・坊城遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1993「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城  
遺跡」香川県教育委員会はか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2004「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調  
査報告第5冊 中森遺跡 林・坊城遺跡Ⅱ 東山崎・水田遺跡Ⅱ」香川県教育委員会はか

三谷石舟古墳：香川県教育委員会編 1983「新編香川叢書」新編香川叢書刊行企画委員会

三谷中原遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2019「県道中德三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 三谷中原  
遺跡」香川県教育委員会はか

横内東遺跡：高松市教育委員会編 2012「高松市埋蔵文化財調査報告第144集 三谷コミュニティセンター整備事業に伴う埋蔵文化  
財発掘調査報告書 横内東遺跡」高松市教育委員会

六条上青木遺跡：高松市教育委員会編 2016「高松市埋蔵文化財調査報告書第174集 保有園新施工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報  
告書 六条上青木遺跡」高松市教育委員会はか

六条下所遺跡：高松市教育委員会編 2014「高松市埋蔵文化財発掘調査報告第152集 高松市内遺跡発掘調査概報－平成 25 年度国  
庫補助事業－」高松市教育委員会

第9表 六条下所遺跡出土土器観察表

番号	地名	遺物名	種類	形態	調査		色調		粘土		法量(㎤m)		残存率	備考					
					外面	内面	外部	内部	石英、長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口沿	壁高	底径	その他		
3 1区	SD1014	朱生土器	甕(不明)	(不明)	10YR7.4±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	10YR7.4±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	粗、多	-	-	-	-	(9.2)	-	1.8			
4 1区	SD1014	朱生土器	甕(不明)	ヘタミガキ	7.5YR6.4±5.5灰	10YR7.3±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	粗、多	中・多	少	-	-	-	11.0	-	3.8		
6 1区北	SD1013	朱生土器	甕(不明)	(不明)	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	粗、多	粗、多	少	-	-	-	9.5	-	8.8		
7 1区北	SD1013	朱生土器	甕(不明)	筒オサエ	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	粗、多	-	少	-	-	7.6	-	7.8			
8 1区	SD1013	朱生土器	甕(不明)	ヘタミガキ	2.5Y7.2灰灰	2.5Y7.3灰灰	2.5Y7.2灰灰	2.5Y7.3灰灰	粗、多	-	-	-	-	-	-	1.8未調			
9 1区	SD1013	朱生土器	甕(不明)	(不明)	10YR6.4±5.5黄褐色	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR6.4±5.5黄褐色	10YR7.2±5.5黄褐色	粗、多	-	少	-	-	-	-	1.8未調			
10 1区	SD1013	朱生土器	甕(不明)	(不明)	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR7.4灰褐色	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR7.4灰褐色	粗、多	-	-	-	-	-	7.6	-	3.8		
11 1区	SD1013	朱生土器	甕(不明)	ハケ	10YR6.4±5.5黄褐色	10YR6.1灰灰	10YR6.4±5.5黄褐色	10YR6.1灰灰	粗、多	-	-	-	-	-	10.0	-	1.8		
23 1区	SR1001	周文土器	深鉢	ヘタミガキ	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR7.2±5.5黄褐色	10YR7.2±5.5黄褐色	中・多	-	少	-	-	-	-	-	破碎		
26 3区	SD3003	土脚質土器	甕(ナダ)	刮板ナダ	10YR7.4±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	10YR7.3±5.5黄褐色	細、多	-	-	-	-	-	9.6	-	1.8未調		
27 3区	SD3003	土脚質土器	甕(ナダ)	刮板ナダ	2.5Y7.2灰灰	10YR7.6明黃褐色	中・多	少	中・多	少	中・多	-	-	-	6.1	-	5.8		
28 3区	SD3003	土脚質土器	甕(ナダ)	刮板ナダ→ 刮板ナダ切り	2.5Y6.4±5.5黄	7.5YR7.6灰	中・少	中・少	中・少	中・少	中・少	-	-	-	(7.0)	-	1.8		
29 3区	SD3003	肩出器	甕(ナダ)	刮板ナダ	N7.4灰白	N7.4灰白	N7.4灰白	N7.4灰白	細、少	-	-	-	-	2.2	-	6.8			
30 3区	SD3003	土脚質土器	甕(ナダ)	刮板ナダ	10YR6.6明黃褐色	10YR6.6明黃褐色	10YR6.6明黃褐色	10YR6.6明黃褐色	細、少	-	-	-	-	4.4	-	1.8			
31 3区	SD3003	黑色土器	甕(ナダ)	刮板ナダ	2.5Y8.4±5.5黄	N4灰	中・多	少	中・多	少	中・多	-	-	-	7.1	-	1.8		
32 3区	SD3003	土脚質土器	足踏	刮板ナダ	2.5YR6.4±5.5灰	2.5YR7.4±5.5灰	2.5YR7.4±5.5灰	2.5YR7.4±5.5灰	細、少	-	少	-	-	-	-	1.8未調			
33 3区	SD3003	土脚質土器	足踏	刮板ナダ	2.5YR6.4±5.5灰	2.5YR7.4±5.5灰	2.5YR7.4±5.5灰	2.5YR7.4±5.5灰	細、少	少	中・少	-	(18.5)	-	1.8				
34 3区	SD3003	土脚質土器	要(ナダ)	刮板ナダ→ 刮板ナダ切	5YR7.2灰褐色	10YR6.4±5.5黄褐色	10YR6.4±5.5黄褐色	10YR6.4±5.5黄褐色	中・多	中・少	-	-	-	(11.2)	-	3.8			
35 3区	SD3004	土脚質土器	甕(ナダ)	刮板ナダ切	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	中・少	中・少	-	-	-	10.5	2.3	6.7	-		
36 3区	SD3004	土脚質土器	甕(ナダ)	刮板ナダ	5YR7.6灰	6.5YR8.6灰黃	中・少	中・少	中・少	中・少	中・少	-	-	-	7.6	-	1.8		
37 3区	SD3004	黑色土器	甕(ナダ)	刮板ナダ→ 刮板ナダ切	2.5Y7.3淡黄	10Y3.1-4.1-7.0灰	10Y3.1-4.1-7.0灰	10Y3.1-4.1-7.0灰	中・少	中・少	中・少	多	-	(6.4)	-	2.8			
38 3区	SD3004	燒成器	鉢	刮板ナダ→ 刮板ナダ切	N8灰白	N8灰白	N8灰白	N8灰白	中・少	中・少	中・少	多	-	25.5	100	11.1	-	8.8	
45 3区	SD3003	燒成土塊?			10YR8.2浅黃	2.5Y7.1灰白	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	粗、多	中・少	中・少	-	-	-	-	-	-	-	

第10表 六条下所遺出土石器觀察表

編文番号	測定面	測量名	石材	厚	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	1区	SR1001	サスカイト 石頭	2.65	1.6	0.4	1.20		
2	1区	SR1001	サスカイト 石頭	2.65	1.6	0.4	1.20		
5	1区	SD1014	サスカイト 石頭	2.1	2.0	0.3	0.91		
12	1区	SD1012	サスカイト 石頭	1.8	1.65	0.2	0.57		
13	1区	SD1012	サスカイト 石頭	2.4	1.35	0.4	0.94		
14	1区	SD1012	サスカイト 石頭	2.3	1.6	0.3	1.10		
15	1区	SR1001	サスカイト 石頭	1.4	1.2	0.2	0.21		
16	1区	SR1001	サスカイト 石頭	2.5	1.3	0.2	0.76		
17	1区	SR1001	サスカイト 石頭	2.9	1.75	0.35	1.50		
18	1区	SR1001	サスカイト 石頭	2.65	1.2	0.35	1.02		
19	1区	SR1001	サスカイト 石頭	1.8	1.15	0.2	0.60		
20	1区	SR1001	サスカイト 石頭	1.9	1.8	0.35	1.00		
21	1区	SR1001	サスカイト 石頭	2.6	1.3	0.4	0.82		
22	1区	SR1001	サスカイト 石頭	3.1	1.9	0.4	3.08		
24	2区	SD2001	サスカイト 石頭	3.0	1.45	0.2	1.10		
25	2区	SD2001	サスカイト 石頭	1.8	1.4	0.2	0.57		
39	3区	SD3004	サスカイト スクリーフィバー	6.5	4.2	1.0	23.00		
40	3区	SK3004	サカイト 大打石	1.9	1.3	0.9	2.34		
41	3区	SX3003	サスカイト スクリーフィバー	10.4	3.35	1.6	31.24		
42	1区	遺傳物	サスカイト 石頭	1.85	1.3	0.2	0.59		
43	1区	遺傳物	サスカイト 石頭	2.2	1.6	0.35	1.03		
44	3区	遺傳物	サスカイト 石頭	1.9	1.45	0.4	0.67		

写真 6  
1 区  
遺構検出状況  
(西から)



写真 7  
1 区  
全景  
(北東から)



写真 8  
1 区  
全景  
(東から)



写真 9  
1区  
SB1001  
(南から)



写真 10  
1区  
SB1001-SP1064 断面  
(東から)



写真 11  
1区  
SB1001-SP1065 断面  
(東から)



写真 12  
1区  
SR1001  
流路 A-D 検出状況  
(北西から)



写真 13  
1区  
SD1012 断面  
(南から)

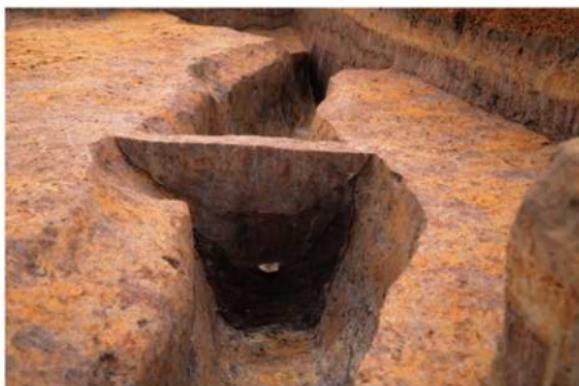


写真 14  
1区  
SD1013 断面  
(南から)



写真 15  
1区  
SD1013  
弥生土器出土状況  
(南から)



写真 16  
1区  
SD1014  
(南から)



写真 17  
1区  
調査状況  
(東から)

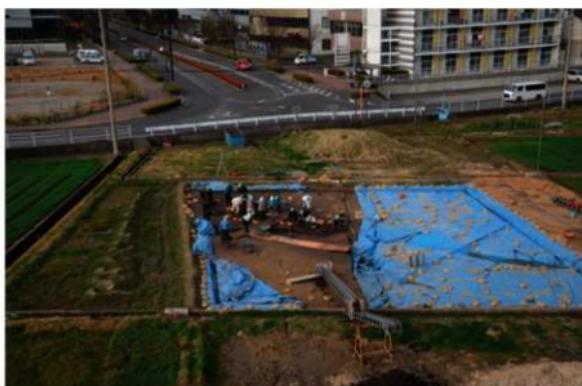


写真 18  
1区  
SR1001  
流路 A-D 調査状況  
(南から)



写真 19  
1区  
SR1001 石鎌出土状況



写真 20  
1区 SR1001 断面  
(南東から)



写真 21  
1区  
SR1001 断面  
(南東から)



写真 22  
1区  
SR1001 流路 A·B  
(南から)



写真 23  
1区  
SR1001 流路 A-D  
(北から)



写真 24  
1区  
地割れ状遺構検出状況  
(東から)



写真 25  
1区  
地割れ状遺構  
(東から)



写真 26  
1区  
SR1001 下層断面  
(東から)



写真 27  
1区  
基盤層剥片出土状況  
(南から)



写真 28  
2区  
全景  
(南から)



写真 29  
2区  
北壁断面  
(南東から)



写真 30  
2区  
SK2002・SK2003 断面  
(南から)



写真 31  
2区  
SD2001・SD2002  
(南から)



写真 32  
2区  
SD2001・SD2002 断面  
(北から)



写真 33  
3区  
全景  
(南から)



写真 34  
3区  
SD3004 断面  
(南から)



写真 35  
3区  
SD3004  
土師質土器出土状況  
(南西から)



写真 36  
3区  
SD3007 断面  
(北から)



写真 37  
3区  
SD3009 断面  
(南から)



写真 38  
発掘体験





4



9



6



35



38

写真 39 六条下所遺跡出土遺物 1



写真 40 六条下所遺跡出土遺物 2



報告書抄録

県道太田上町志度線道路改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

六条下所遺跡

2021年2月28日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191 Fax 0877-48-3249

発行 香川県教育委員会

印刷 ワールド印刷株式会社